

# 福井の科学者

地域に根ざす科学者運動 **127**

2016・12

## 目 次

- 庄野義之先生追悼特集 (1)  
庄野義之先生のご冥福をお祈りします 小倉久和 (4)
- 庄野義之先生に学ぶ 櫻井康宏 (6)
- 初期の日本科学者会議福井支部と庄野先生 西川嗣雄 (10)
- 庄野義之先生と日本科学者会議福井支部での活動 高木秀男 (12)
- 庄野義之先生を偲んで ～ 学問の自由 山本富士夫 (16)
- 庄野義之氏を偲んで 隼田嘉彦 (17)
- 庄野義之先生のご冥福をお祈りします 寺岡英男 (18)
- 庄野先生を偲んで 森透 (19)
- 原発反対運動に尽力された庄野先生 滝史郎 (20)
- 「小沼丹」の余白へ 屋敷紘美 (21)
- 学生運動の源流「東京帝国大学新人会」  
—第1回 大正デモクラシーと東京帝大新人会の結成— 高木秀男 (26)
- =新著紹介=  
西條敏美著『知っていますか？ 日本数学者ゆかりの地  
—日本数学の源流を訪ねて—』 高木秀男 (34)
- =新刊案内=  
平野治和編著『花もひらかぬ一八のまま  
—沖繩戦で散った少年飛行兵の日誌—』 高木秀男 (37)
- =編集後記= (38)

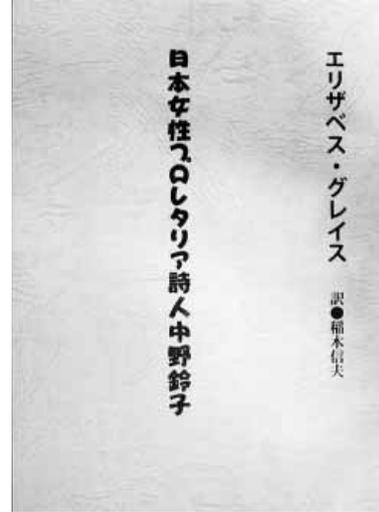
日本科学者会議福井支部

＝論文紹介＝

エリザベス・グレイス著 稲木信夫訳

## 日本女性プロレタリア詩人中野鈴子

この論文は、イギリス在住の女性エリザベス・グレイスさんが2009年当時、オックスフォード大学日本学部の院生であったころ書いた修士論文である。中野鈴子の研究家である稲木信夫氏のところをグレイスさんが訪れ、サゼッションを受けた縁で本論文の翻訳を稲木氏が行なった。この論文の要旨が『福井の科学者』116号（2011年）に発表されたが、その後、完全訳を完成させるために稲木氏とグレイスさんが協力して取り組み今回冊子となった。グレイスさんは現在、韓国文学を研究しているとのこと、それは1920年後半以降の日本のプロレタリア文学運動への弾圧期における鈴子と朝鮮の関係から、避けて通れない問題であったという。なおグレイスさんは、いま稲木氏の主著『詩人中野鈴子の生涯』の英訳にあたっているとのことである。



### 目次

#### 序

#### 第1章 プロレタリア女性詩の誕生

1. 初期
2. 東京での活動—恋は二の次、我々はたたかうのだ

#### 第2章 プロレタリア女性詩人への理論

1. プロレタリア文学理論—蔵原惟人とプロレタリアリズム
2. プロレタリア女性詩論—マルクス主義とプロレタリアート、そして女性問題
3. プロレタリア女性詩論—中野鈴子プロレタリア文学運動

#### 第3章 プロレタリア女性詩を読む

1. 余白からの歌—どのように鈴子を読むべきか
2. プロレタリアの母
3. プロレタリアの妻
4. 妹として
5. プロレタリア女性詩—その他の反戦詩

#### 第4章 「花も私を知らない」—抵抗の生涯の結末

#### 参考文献資料

#### 翻訳について

(本書の問い合わせ先 〒910-0034 福井市菅谷1丁目13-19 ルーチェすがや 403号 稲木信夫)

## 庄野義之先生追悼特集

福井大学名誉教授の庄野義之先生は、2016年6月8日に御逝去されました。ここに謹んでご冥福をお祈りするとともに、先生と関係の深かった方々からの追悼文を掲載し小特集といたしました。最初に先生の略歴と先生がつくられた短歌、お写真などを紹介し、その後に追悼文で先生を偲びます。

### <略歴>

- 1931年 大阪で誕生
- 1953年 北海道大学理学部卒業（物理学科）
- 1955年 同 大学院理学研究科物理学専攻修士課程修了
- 1958年 同 博士課程 単位取得，退学
- 同年 北海道大学理学部 助手
- 1964年 理学博士（北海道大学）
- 1965年 広島大学理学部 講師
- 1971年 福井大学工学部 教授
- 1993年 福井大学工学部長（～1997年）
- 1997年 福井大学長事務取扱（3月）
- 同年 定年退職，福井大学名誉教授
- 同年 放送大学福井学習センター 初代センター長（～2002年）
- 2016年 逝去，享年85歳



福井大学工学部応用理学教室の先生方と（1979年12月24日）

庄野義之先生が詠まれた和歌を年代順に紹介  
します。

子等の摘みしセリの香りのなつかしさ  
おそく帰りし夜の食卓  
(福井に赴任して間もない開発にいた頃)

滴一滴音もなく刻む点滴の  
無為の時間のいとおしきかな  
(2003年、日赤にて手術を前にして)

近づきてまた遠ざかる病棟の  
夢と希望の夜の足音  
(2003年、病棟の夜ベッドの中で)

美<sup>うる</sup>わしき桜の国の行く末を  
憂<sup>うれ</sup>う頭に一ひらの花  
(2005年ころ)

世の中に永<sup>とわ</sup>久なるものなきことを  
知りつつ学<sup>ま</sup>ぶ永<sup>ま</sup>久の真理<sup>まこと</sup>を  
(2005年ころ)

ただ一人川辺を行けばあづさ川  
八十路なぐさむせゝらぎの詩  
(2012年)

明神の神のめぐみか台風も  
去りて明るき神降地の朝  
(2012年)

なさんとしならざることの多かりき  
くわいの味のほろにがき元旦<sup>あき</sup>  
(2013年ころ)

わが命長く伸びよと夕暮れの  
伸びゆく影につぶやきてみる  
(2013年ころ)

嬉々として春をさえずる揚げひばり  
深き雪の日知るや知らずや  
(2013年ころ)



上高地にて (2012年)  
(2012年に詠んだ歌は上高地に旅行した  
ときの歌です)



「悪魔の飽食」ロシア公演に同行して (2013年)

「悪魔の飽食」ロシア公演に同行したときの  
スナップ写真 (2013年)



奥様は「悪魔の飽食」合唱団の一員としてロシア公演に参加され、庄野先生は団員の一行に同行されました。ごらんのように、まだここ頃の庄野先生はお元気でした。

## 庄野義之先生のご冥福をお祈りします

小倉久和 (福井大学名誉教授)

庄野先生がご逝去されました。こころより哀悼の意を表します。また、ご遺族の方々に謹んでお悔やみ申し上げます。

私は、福井大学工学部の主に教育システムの改革に関わるなかで、庄野先生から強い薫陶を受けました。編集者より追悼文の依頼を受けましたが、この日本科学者会議を通してというよりは、私の経験した大学の運営・改革のなかでの思い出を綴ることで追悼文に代えることをご容赦下さい。

私は1988年に福井大学工学部情報工学科へ赴任しましたが、それは工学部が11学科の小講座体制から7学科の大講座体制に改組・再編したときでした。当時は多くの地方大学の工学部が同じような方向で大学改革・改組の真っ最中だったのです。京都大学でも情報系学部の設置構想が打ち上げられていて（これはとん挫して、後に情報学研究科に）、教育学部と工学部の2学部しかなかった福井大学でも長期計画検討委員会を中心に情報系の第3学部設置を目指した構想の検討が進んでいて、庄野先生はその委員会の中心メンバーでした。私は赴任早々、検討の末端の会議に学科の教員とともに呼ばれ、構想について庄野先生から話を伺いました。この構想は学部増設は認めないという文部省の強い姿勢でとん挫しましたが、工学部ではこの構想検討と並行して、当時修士課程だけの大学院に博士課程を設置する準備が進行中でした。

工学部の博士課程設置は文部省の方針に沿ったものだったようで、準備中は学部内でいろいろあったようでしたが、設置審査を受けて無事合格し、1993年に設置が実現しました。庄野

先生はこの年に工学部長に就任され、2期4年間務められました。この年、私もたまたま情報工学科の主任（任務名、年度途中から学科長という役職に変更）を担当し、庄野先生の主宰する工学部の会議に出席することになりました。また、この年、神野学長が着任され（1期4年目の任期終了間際に逝去）、大学の改組について新たな構想を立てることになりました。庄野先生は、工学部に新しく発足した博士課程の管理運営の方法と組織をゼロから作り上げる作業をしながら、神野新学長の下で新たな大学改革の構想を検討しその中心的な課題である教育改革構想、とりわけ工学部の教育システムのもっていた多くの課題や問題点を整理しどう克服していくのか、という2つの大きな課題に取り組むことになったのです。さらに、神野学長の2年目から検討が始まった「4学域構想」にも多くの力を割くことになりました。

当時、工学部では教育のシステム自身を検討する委員会はなく、厚生補導委員会（現教務学生委員会）が主に教育での管理運営（カリキュラムの改廃、学生の厚生補導など）を担っていました。庄野先生は、大学改革では教育システムそのものについて検討する組織が必要であるという持論から、学部長就任時に「工学部教育委員会」なる新組織を立ち上げ、多くの教員が何をやる委員会なのか疑問を投げる中、自ら委員長に就任してけん引し、工学部と全学の教育システムの現状と課題について分析を行いそれを報告書にまとめられました。先生は、自身が熱心に精力的に取り組み方向性を出していくと同時に、多くの人々を組織し一緒に議論・検討

しながら作業を進め、実現できるものは実現させる、という、指導力、行動力、組織力とともに決断力を示し、名学部長として手腕を発揮されました。私にとっては初めての大学運営・改革の経験でしたが、全学課題から工学部の課題まで、庄野先生のもとで4年間、この教育委員会を中心にさまざまな会議に参加し活動しました。この経験は、私にとって、文字通り先生からの「薫陶」でした。

庄野先生は1997年、学部長退任と同時に定年で退職され、後任学部長に玉置先生が就きました。玉置先生も、国立大学法人化前の騒然たる状況の中で采配を振り、名学部長ぶりを発揮されました。私は、庄野先生が玉置先生を表舞台に引っ張り出したのではないかと考えています。私は、玉置先生とはそれまでいくつかの委員会で同席はしていましたが、目立った印象はなく、あまり存じ上げていませんでした。庄野先生は学部長2期目に、全学および学部改革の諸課題に対応するため、いくつかのグループを組織されましたが、1つの重要なグループを玉置先生に託し、私は玉置先生のグループに入りました。グループの検討の中で知った玉置先生は、若くて、柔軟で、かつ決断力と指導力のある、非常に個性豊かな先生でした。玉置先生の学部長2期4年間、私は引き続き教育委員会を担当することになり、都合8年間2代にわたる名学部長の薫陶を受けました。庄野先生ならどうするだろうかと考えながら、玉置先生の下で大学改革や学部改革について検討・活動していたことを、昨日のように思い出します。(玉置先生は学部長退任の年の秋に突然に逝去されました。杳然としてしまった記憶があります。)

庄野先生のご冥福をお祈り致します。

## 庄野義之先生に学ぶ

櫻井康宏 (福井大学名誉教授)

私が福井大学工学部の助手として着任したのは1971年であり、所属は建設工学科(後に環境設計工学科, 建築建設工学科に改編)の都市工学講座であった。講座では、城谷豊先生・玉置伸悟先生・本多義明先生という素晴らしい先生方に囲まれていたが、工学部の中でも社会問題としての建築・土木を扱う分野であり、教職員組合や科学者会議の活動にも当然のように深く関わることとなった。

その教職員組合の工学部教員職域の『職コン(職域懇談会)』を実質的に支えていたのが応用理学教室の物理系の先生方であり、その中心に庄野義之先生がおられた。その時以来、私自身の定年退職後のつい最近まで、庄野先生からは実に多くのご教示をいただき、また、多様なネットワークにつなげていただいた。そのいくつかを思い起こし、心よりの感謝と哀悼の意を表すこととしたい。

### 1. 庄野先生に導かれて

#### 1) 『父と子の原発ノート』のこと

1978年5月に、ゆきのした文化協会と日本科学者会議福井支部の共同編集で『父と子の原発ノート—それは若狭に灯をともしたか』が出版された。科学者会議から参加した編集メンバーは庄野先生のほか岡田栄一先生、高木秀男先生と私の4名であった。

ゆきのした文化協会の稲木信夫氏は、その編集後記で「本書は、この原子力発電所に関して可能なかぎりの基礎事実をあつめ、わかりやすさをモットーに編集した。未来への判断は、読者のみなさんにゆだねよう」と述べておられる

が、その姿勢は、まさに科学者としての庄野先生の基本姿勢であったと記憶している。

本書は、一人の中学生と父親との対話およびそれを補完する父親のノートによって構成されているが、その中に、『未来を語らう』と題する座談会が挿入されている。出席者は、庄野先生と岡田先生と私に加えて、「原子力発電所設置反対小浜市民の会」の事務局長であった中島哲演氏(明通寺副住職)の4名である。その終盤で語られた庄野先生の次のような言葉を今でも鮮明に覚えている。

「原発にかぎらず、公害問題にみられるように、科学不信にまでいくような、ひずんだ科学の使われ方がありますね。原子力の場合とはくに始まりから戦争と直結していましたから、とくにこれが国民のために使われるようにすることは、科学への信頼を回復するためになすべき科学者の立場だと思えます」(同書 P210)

「あの結論(筆者注:原子力船『むつ』の放射線漏れ後の帰港判断)は漁民としては不満もあったと思いますが、自分たちが推薦した科学者だからというので従ったのですね。これは小さなことですが、国民と科学者の関係という点で将来への教訓になりますね」(同上)

「科学」と「科学者」に対する庄野先生のこの厳しい姿勢に触発されて、その後の私は、建築計画学の研究者として「施設づくり」「まちづくり」の運動に参加しながら実践的な研究を試みることになるのであるが、その間の「学び」の経過を『計画論ノート』として『福井の科学者』誌に連載させていただいた(1985年2月～1989年5月)。若輩の拙い「覚え書き」程

度のものであったが、庄野先生はそれに眼を通して大いに励まして下さった。

## 2) 放送大学客員教員のこと

庄野先生は、1997年に福井大学を定年退職されて放送大学福井学習センターの初代所長に就任された。その頃の私は助教授から教授へと昇任し、研究以外の「教育」や「大学運営」「地域貢献」などを考えざるを得ない立場になりつつあった。そんな時期に、庄野先生から放送大学客員教員のお誘いをいただいた。先生との議論が継続できることを楽しみに、即座にお引き受けしたのであるが、結果的には2代目藤川一芳先生、3代目久高喜行先生、4代目中村圭佐先生、5代目鈴木敏男先生の長期間（2001年9月～2008年3月、2012年6月～2015年3月）にわたってご一緒させていただいた。

まさに「生涯学習」の拠点大学としての放送大学での経験は、「教養教育」を含む大学教育のあり方と「大学連携」や「地域連携」のあり方を考える上で大いに役立たせていただいたばかりでなく、私個人にとっても、放送大学大学院生の指導が小生の研究室博士後期課程への入学につながり、さらには、『住まい学入門』という放送教材（放送大学教育振興会発行）の執筆につながるなど、教育と研究の両面で極めて充実した経験をさせていただいた。

この間、庄野先生は、所長退任後も毎年2度ある卒業・入学式には必ず出席され、卒業生・新入生や私ども客員教員を相手に「教育」談義を熱心に持ちかけるなど、その探究心はいつまでもご健在であった。

## 3) 庄野先生主宰の研究会のこと

庄野先生は、定年後も所長退任後も福井大学キャンパスを頻りに訪れて、あちらこちらの研究室に立ち寄っては議論を継続されていたようである。私の研究室にもしばしばお寄りいただいていたが、ある時期から先生主宰の研究会

を開催することとなった。参加メンバーは、小倉久和先生・松浦義則先生・寺岡英夫先生と私の4名であったと記憶しているが、全員がそろろうことも少なく数回を実施して中断となり、2007年10月25日付のメモと分厚い冊子を庄野先生からいただいたまま、現在に至っている。

いま改めてそのメモと冊子を拝見すると、先生の想いに応えきれなかった当時の事情と力不足を反省しつつ、その想いにキチッと応えるべく、少なくともその想いを後世に伝える努力をすべき…という思いで以下に記録させていただくこととする。

まず、2007年10月25日付のメモ（手紙）には、手渡された冊子の趣旨が次のように書かれている。

私たちの研究会「論理を探る」は、現職のメンバーの方々がご多忙のため、長らく開催できない状態にあります。当面、無職で非多忙な私が何とか自分に興味のあるテーマで考えたことをまとめ、皆さんにご検討を頂き、個別的にでも議論していただき、またご意見を頂きながら、研究会を繋いで行ければと思っております。

## 2. 庄野先生による論理の探求

メモ（手紙）と一緒にいただいた冊子のタイトルは『『ゆらぎ』、『多様性』と事物の変化』というものであり、『ゆらぎ』を「特定の方向性をもたず（または定向性＝定まった特定の方向性をもたず）、特定の質的な発展もなく、その起こり方が確率的であるような事象」と定義した上で、「物理的対象に限らず、自然界、生物界、人間の脳活動、社会、歴史、等々可能な限りさまざまな対象について、多様性の問題を含む『広い意味でのゆらぎ』と『方向性』＝質の発生について例証をあげながら議論し、そこにまた新しい論理を見いだすことを試みてみたい」と、冊子の目的が記載されている。

そして、A4版で17ページからなる冊子は以下の7章構成となっている。1章の「物理世界」に始まって7章の「物理世界」に再び戻るといふ構成自体に、庄野先生の論理探求の姿勢が端的に現れているようにも推察されるが、残念ながらそれを解説する力量が私にはない。そこで「ここが要!」と思われる箇所を、私の独断でピックアップ(抜粋ページを記載)して解説に代えさせていただくこととする。

### 1) 物理世界における「ゆらぎ」

(P2) 自然界における基本的な変化に「ゆらぎ」とその成長による「相転移」が関わっていること、そのことにより自然界に新しい質が発生していること(言い換えれば、変化の新しい方向性が生まれたこと)はきわめて興味深いことである。

(P3) 相対論と並んで現代物理学の基本法則である量子力学はその基本に「ゆらぎ」をもっており、現在量子論と相対論のさまざまな統合や結合が試みられているがまだ未完成である。(中略) また素人の想像として時空の理論としての「一般相対性理論」自身を「ゆらぎ」を含むように改変できないかとも考えている。

### 2) 生物界における「ゆらぎ」

(P5) 地球上に生まれた生物種の99%は絶滅し、現存している生物種は1%程度と言われている。また生物種となり得なかった変異も無数にあらう。それでも多種多様な生物種が現存していることは、DNAとタンパク質の分子としての多様性、そしてそれを生み出す複雑な生物分子の耐えざる「ゆらぎ」の役割をあらためて強く感じさせる。そしてこのような複雑多様な生体分子界の存在を保証した、生物発生の一段階前の「原子・分子の階層」の豊富さと反応性の強さにもあらためて注目しなければならない。

(P8) すこし古いが下記の文献によりミドリムシなど下等な生物の外界に対する反応と行動

(走性)について簡単に触れる。(中略)これらについてはいろいろな実験もなされていて、結論的なことがいえるかどうか現時点ではわからないが、生物の行動には<「ゆらぎ」つつ模索する>というパターンがしばしば見られるのではないかと、その一例をあげてみた。

### 3) 脳における「ゆらぎ」

(P9) 特定の脳活動とは直接関係なく脳は絶えずランダムな発火を続けているようだ。そして外的または内的な刺激により特定部分のニューロン群が発火し、これが脳の特定の意味を持った活動になって現れるようだ。ランダムな発火～脳活動のゆらぎは特定の活動に備えた準備的な活動と考えられ、これがまた脳の「基底状態～真空状態(物理学における量子場の真空のゆらぎを模して)」の姿であり、脳が生きていることの証ではないだろうか。

(P10) 脳神経が増加し後に減少する一定の間は脳神経系発達の「臨界期」といわれ、人間では3歳くらいまでの幼児期と10歳くらいの思春期初期にあるといわれ、その時期を過ぎるとそこで得られるはずの能力を獲得するのは不可能ではないが特別の手だてが必要になると言われている。

(P13) 「予想脳」の考えは、あくまで一つの仮説であるが、ここで興味ある点は脳内に未来のための判断をする機能と同じ脳内に示される判断されるべき材料が確率を付して提示されるということ、そして判断する機能によって、ある行動や考えが「選択」されるということである。生物の進化においては生物独自の機能として突然変異がある確率的な仕方でき、変異種が環境による淘汰により、また偶然的にある種が残される。つまり自然に選択されるのであったが、ヒトの脳に至って、選択する機能と選択されるものを表現する機能の両者が同一脳内に存在するようになった、というのが興味のある

ところである。

#### 4) 子どもの発達期における「遊び」

(P15) 子どもの発達期の遊びは、はっきりした目的や計画性がほとんどなく、その意味で「方向性（定向性）」がなく、またしばしば遊びの対象や種類も変化する。しかし多くの場合非常に真剣なものがある。おそらく一人の人間とくに社会性をもった人間となるための準備、模索の段階を過ごしているのであろう。ここでは将来の定まった方向を見いだすための「ゆらぎ」ととらえて、より深く考えてみたい。

#### 5) 人間の行動の「計画性」

(P15) 人間のもつ優れた能力の一つに「計画性」がある。先のことについて、その目標を定め、その意義についても吟味し、その目標に到達するための効率的な道を定め、それに従って行動する。これはヒトという種の遺伝的な特性と学習や経験から対象や自分自身を含む人間についての法則的な知識を獲得し、適用しうる能力から可能になることである。しかし一方この「計画性」のもつもう一つの面についても注意する必要がある。それは「先のこと」についての考えや行動の固定化である。

(P16) ここで注意したいのは「計画性」の優れた面とともに、それが一方で「ゆらぎ」の幅を狭める面があるということである。「先の見通し」についてはその根幹の太い部分（これがもっとも重要）と絶えず周辺や自己の状況への模索～「ゆらぎ」の部分があることも考慮する必要がある。「ゆらぎ」はしばしば計画の改善や場合によっては転換に導くこともあろう。

#### 6) 歴史

(P17) 現在過ぎつつある世界または日本の歴史を観察していれば、現在の時点より以前から流れている強いまたは太い幹のような流れと、短期間で変わってゆく「ゆらぎ」の部分がつれ合っているように見える。この様相はど

の時点で切ってその断面を考察しても変わらないと思う。歴史はある時点で見れば、過去からの動きの継続であり、同時に絶えず人間の意志や行動がその方向に修正を加えてその方向を変えようとしている。人間の力で変わる場合もあるが（小さな変化は絶えず起きているが）必ずしもそのとおりに進まず修正が行われる。物理学的に言えば、人間の力で絶えず初期条件を与えなおしているような系である。何か法則性があり得ることが伺える。（中略）おそらく歴史、つまり人間の社会の動きについては、絶えず各時点で、その後の動きについて多くの可能性があり、またそれらの可能性に実現の確率を与えられるようなものではないか、と想像される。歴史の中に過去の時点における「もし」を見いだして、それらを確率的に考察することが望まれる。

#### 7) 量子力学における「ゆらぎ」

(P17) 現在物理世界におけるもっとも基本的な量子力学では、その基本に「ゆらぎ」が横たわっている。ここではまだ取り上げられないが、その「ゆらぎ」＝量子力学の構造について、十分調べる予定である。

以上、いただいた冊子を再度精読し、当時76歳であった庄野先生の溢れんばかりの探究心と壮大な構想に改めて気づかされている。「失われた10年、20年、30年」とも呼ばれる社会にあつて、それを切り開く方向性を庄野先生がどのように捉えておられたのか、議論できなかったことが悔やまれてならない。謹んで哀悼の意を表します。

（メモから9年後の2016年10月25日に記す。）

## 初期の日本科学者会議福井支部と庄野先生

西川 嗣 雄 (福井大学名誉教授)

私が初めての職を得て福井大学へ来たのが1971年4月。庄野義之先生は、同じ年の6月に広島大学から福井大学へ来られた。二人は共に、旧応用理学教室(工学部基礎教育を担当する共通講座が集まった組織。)の構成員として、庄野先生は数学担当者のグループに所属され、私は物理学担当者のグループに所属した。数学担当者のグループには、既に、長谷川健二先生、下田屋一朗先生がおられた。同じ年の11月には、坂東弘治先生が京都大学から来られて数学担当者のグループに所属された。このグループの4名は原子核理論を専門とする人たちで、地方大学では珍しく、研究者が4名もそろったこの分野における研究拠点の一つとなった。

当時の福井における日本科学者会議(以下「JSA」と略記)は、まだ支部が結成されてはいなかった。JSA会員は、下田屋先生を中心に、長谷川先生、影山剛先生、久津木俊樹先生、藤本文朗先生、高木秀男先生などが集まり、支部準備会として例会などの活動を行っていた。この年の5月に開催された支部準備会総会では、早期に支部を発足させるという方針が合意され、下田屋先生を事務局長として、その準備が進められることになった。

支部結成に向けては、広く県内の科学者に呼び掛けるといふことで、庄野先生も含めて22名の呼びかけ人の連名で「福井支部結成のよびかけ」を発表した(私の古いノートには、呼び掛け文の構想を練った際の詳細なメモ書きが残っている)。呼び掛け文や入会申込書などは、県内の大学、高専、短大の教員、各種試験研究機関の研究者、高校の教員等2,000名以上の人

達に届けた。そのうちの郵送分については、事務局長が所属する応用理学教室のメンバーが担当し、庄野先生も含めて、封筒詰めや宛名書き、切手貼りの作業を行った。

JSA福井支部結成総会は、その年の11月23日に開催された。総会では、原発、公害、教育、研究条件、学術会議、沖縄、科学者運動の課題について、問題提起が行われた。

総会後の第1回幹事会では、各幹事の任務分担が決められ、庄野先生は瀬川洋先生と共に、情宣担当になられた。

支部結成総会の前、その年の10月25、26の両日にわたり、JSA京都支部が中心となり福井支部準備会も参加して組織された、「大飯町原子力発電所問題調査団」の現地調査が行われた。京都支部の代表は確か永田忍先生(当時京都大学助教授で、原子核理論研究者)で、福井支部準備会からは、庄野先生も参加されていたと記憶している。庄野先生が原発問題に取り組まれるきっかけになった活動だったと思う。

1972年5月に開催されたJSA福井支部第1回定期大会において、支部に「原発問題研究委員会」を設置するという決定がなされた。原発問題研究委員会は庄野先生を中心に組織され、情報収集や各種事故の解析、原発をめぐる情勢の分析、住民に対する啓発活動など、地道な取り組みが始められた。

また、庄野先生は福井支部の代表として、JSAの本部に設置され、中島篤之助先生を中心に活動していた「原子力問題研究委員会」に、石川支部の飯田克平先生や静岡支部の林弘文先生などと共に参加し、原発問題に関する全国的

な取り組みの方向性や全国シンポジウムの企画立案などに大きな貢献をされた。

1973年8月24～26日には、「第2回原子力発電問題全国シンポジウム(原子力発電問題若狭シンポジウム)」が、JSA福井支部と京都支部の協力の下、JSAと原発反対若狭湾共闘会議の共催で小浜において開催された。庄野先生は、このシンポ開催の準備段階(企画や講演募集事務、予稿集の作製など)からシンポ終了後の報告集の発行まで、中心となって尽力された。またこのシンポでは、開催直前に、当初予定していた会場の使用許可が取り消される、という事態が発生した。JSAは庄野先生を中心に、共催の共闘会議、特にその構成団体の一つである「原子力発電所設置反対小浜市民の会」の中野哲演師(明通寺副住職)たちと緊密に連携して的確な対応をされ、シンポを無事開催し、滞りなく終了させた、ということも、私の記憶に残っている。

1976年には、「原子力発電に反対する福井県民会議」が結成され、JSA福井支部もその常任幹事団体として参加した。庄野先生は支部の代表として常幹の会議に参加され、技術的な課題に対する問題提起や解析などの他、全県的な運動の方向性の検討などを通じ、会議の民主的な運営を確保することにも大きく寄与された。

こうした原発に関する取り組みの成果は、1978年の『父と子の原発ノート』の出版や、JSA福井支部の各種取り組みのなかから出版された『地域を見直す』、『地域を考える』への論文にまとめられている。さらに庄野先生は、時宜にあった事故解析の論文や、原発をめぐる情勢や原発問題研究委員会・原子力問題を考える会の活動に関する報告などを度々『福井の科学者』に投稿され、支部の原子力問題に関する取り組みを引っ張ってこられた。

また庄野先生は、学術会議の活動にも強い関心を寄せられ、中部地区有権者会の福井県の幹

事として、福井での講演会の開催などにも取り組まれた。

年代は突然飛ぶが、1993年には庄野先生は福井大学工学部長に選出された。その時は、工学部の改組の結果応用物理学科の所属ではあったが、応用理学出身者では初めての工学部長となられた。それまでの工学部は、独立性の強い各学科の寄り合い所帯のようであったが、工学部全体を見渡し、また全学的な見地にも立って、民主的に学部を運営してくれそうな人、という期待を込めての選出であったと思う。私も同じ学科の所属で強く印象に残っているのは、庄野先生が学部長に就任されて以降は応用物理学科の教室会議には出てこられなかった、ということである。自分の出身学科の利害にとらわれず、広い視野に立って民主的に学部運営を行おう、とされる強い意志の表れであったと思う。

庄野先生が福井大学を定年退職された後は、設立間もない放送大学福井学習センターの初代所長に就任された。就任後は、面接授業の講師の依頼のため、県内各大学、短大、高専などの教員の間を回られていた。その際、単に講師依頼のみでなく、訪問先の先生の研究内容を伺って話し込まれることも多かったようである。時々、「あの先生の研究は興味深かったが、話し込んで今日は一人しか回れなかった」というようなお話を伺ったことが思い出される。また、センター退職後も、受講生の学習サークルを組織され、センターの教室で学習会を開かれていたことも楽しそうに話されていた。

庄野先生と私とは職場が一緒だったこともあり、応用理学教室の仲間と共に、ドライブや花見、忘年会の温泉1泊旅行など、色々思い出することも多い。今はただご冥福を祈るばかりである。

それにしても、今でも時々庄野先生の穏やかな優しい視線を背中に感じることもある。それは私だけなのであろうか？

## 庄野義之先生と日本科学者会議福井支部での活動

高木 秀 男 (日本科学者会議福井支部)

福井大学名誉教授の庄野義之先生が、2016年6月8日に逝去された。生前たいへんお世話になった者として、心からご冥福をお祈りしたい。庄野先生の福井大学における業績については小倉久和福井大学名誉教授がくわしく書かれているので、私は庄野先生の日本科学者会議福井支部での活動に触れながら先生を偲びたい。

私が福井工大助教授として福井に来たのは1970年4月で、庄野先生が福井大学工学部教授に就任したのは1年後の1971年である。下田屋一朗氏を中心に日本科学者会議福井支部準備会が結成されたのは1968年1月で、1970年5月、会員数23名で支部準備会第1回総会が開かれた。つづいて1971年5月に会員26名で支部準備会第2回総会を開き、年内に支部を結成することを確認して、世話人として影山剛氏、下田屋一朗氏、西川嗣雄氏を選出した。私はこの準備会の段階で会員となっていた。

1971年11月3日、会員は40名を突破し、「支部結成のよびかけ」を発表し、県内の科学者・技術者、教師、医師など2,000余名に配布し入会を呼びかけた。そして同年11月23日、福井支部結成総会を開き、「日本科学者会議福井支部結成宣言」を採択し、代表幹事に影山剛氏、事務局長に下田屋一朗氏を選んだ。会員数は結成時60名、11月末には74名となった。庄野先生と私は、このとき共に支部の常任幹事となり、翌年、庄野先生は支部の原発問題研究委員会、私は公害問題研究委員会の担当となった。私はこの年の12月4日～6日に堺市で開かれた「第8回全国公害問題シンポジウム・電力産業と公害」に参加し、「若狭湾一帯における原

子力発電所建設と住民運動」という報告を行った<sup>(1)</sup>。

このように庄野先生が福井大学に来られたのと福井支部の結成はほぼ同時期であり、庄野先生の専門が原子核理論ということもあって、先生は精力的に原発問題に取り組まれた。その様子は、終わりに示した庄野先生が『福井の科学者』に書かれた原発関連の論文の多さからもわかる<sup>(2)</sup>。なかでも高速増殖炉に関する解説の連載は、当時として非常に貴重な文献であった。『福井の科学者』に書かれただけでなく、ゆきのした文化協会と日本科学者会議福井支部で協力して出版した単行本『父と子の原発ノート』(1978)では、庄野先生は編集・執筆の中心となった。また日本科学者会議福井支部が自力で出版した、単行本『地域を見直す』(1984)、『地域を考える』(1990)でも原発問題の項を執筆した。そして日本科学者会議原子力問題研究委員会委員も務めた。

庄野先生に個人的に大変お世話になったのは、私自身が20年近く原告として闘った福井工大事件への支援である。福井工大事件は長い事件だけに資料は膨大であるが、まとめて書かれたものとしては、私の書いた『学問の自由と科学者の権利』科学堂<sup>(3)</sup>が一番詳しい。

学問の自由に対する弾圧事件である福井工大事件は、1972年5月の学友会会則改正事件からはじまった。福井工大の学友会は、正会員である学生のほかに、教職員が特別会員として入っている組織で、学長が自動的に会長となる会則になっていた。学友会の執行部である総務委員会に学生部長が自動的に加わることから

分かるように、学生の動きを職員が監視するという形になっていた。この年の学友会総会にかけられた会則改正案は、学生が自主的に活動したいという趣旨がこめられていた。大学当局はこの改正案を阻止するために、総務部長や学生部長らを総会に出席させたが、改正案の一部が賛成多数で仮決議された（会則により、総会が定足数を満たしていない時の決議は仮決議となり、仮決議は公示されて学生総数の4分の1以上の反対がなければ本決議となる）。

金井兼造理事長も参加して臨時教授会が開かれ、学長が会長権限で仮決議を公示させないようにしたらどうかと提案した。同じ総会で仮決議された予算案の方は認めて、会則改正案の方は認めないという筋の通らない提案であった。総会は学友会の最高決議機関であり、そこでの仮決議に教授会が横やりを入れること自体許されないことである。私は発言を求めて「会長にはそのような権限はないと思う」と主張したが、結局、仮決議はにぎりつぶされてしまった。

事件は教授会の直後に起きた。金井兼造の意を受けた総務部長が「教授会の発言に行き過ぎがあった。学長にあやまれ」と圧力をかけてきた。当然、私は「あやまる理由はない」と拒否したが、今度は夜中に私の妻を呼びつけ「学園の方針に反対するのはけしからん。そういう者は『くび』にする。辞令一本で講義をいっぱい持たせたり、取り上げたりできる」と脅迫したのである。この事件が、それから20年におよぶ金井兼造による陰湿な不当差別と迫害のはじまりであった。

日本科学者会議福井支部がこの事件に関わるのは1972年6月からである。当時、福井で問題になっていた福井臨工計画について学習しようと、福井県教祖坂井支部青年部が「公害と教育問題を考える教員集会」を企画した。講師派遣を依頼された日本科学者会議福井支部が私を

推薦した所、新聞報道でそれを知った大学当局が、集会が日曜日であったにもかかわらず、業務命令で出講を禁止したのである。私は当然抗議したが、金井兼造理事長のワンマン体制がしかれた金井学園の体質を考慮して、急遽、講師を金沢大学の飯田克平先生に替わってもらい出席も見合わせた。しかし、それでも大学は後で「差額給与」支給の際、半月分をカットする給与差別を行なった。

1975年5月には、福井大学の理論物理研究者の行っていた合同コロキウムへの参加を禁止するという研究妨害に出、福井大学工学部長からの公文書による参加要請も拒否された。1977年4月には秘書室勤務・学園30年史編纂を命じられ、講義担当を一方向的に解任され、講義を担当していないことを理由に研究室の明け渡しを強要された。『金井学園30年史』が完成すると、1980年2月には図書館勤務を命じ、職員に研究室の取り上げを強行させ、私の雑誌や書籍などの研究資料は段ボールに詰められ図書館事務室に運ばれ、使えない状態にされた。私が弁護士を通じて理事長に抗議すると、逆に進退伺いの提出を強要し、あげくの果てに進退伺いの提出を拒否したという理由で減給処分にしたのである。

私はもはや事を公にして闘う以外にないと考え、1980年4月、日本学術会議学問・思想の委員会に提訴し、5月には講義の再開、研究室の確保、減給処分の撤回を求める仮処分申請を行なったが、理事長は自宅待機命令を発し、図書館の机も撤去するという報復処置でこれに答えた。仮処分申請で減給処分と自宅待機は撤回されたが、本質的な解決は得られなかった。1981年4月、金井理事長は正教授会に「講義をしていないことを理由に私を助教授から事務職にまわしたい」という要請を行ない、これを了承させ月10万円の減給を行なった。私はす

ぐ本訴の準備をし、5月に福井地裁に提訴したが、金井理事長は翌日懲戒解雇でこれに答えた。私は直ちに不当解雇を理由に賃金仮払仮処分申請を行なったが、裁判所は審問もなしに全面的に認め、以降、毎月給与の差し押さえを行なった。

私への支援活動は、初期の段階では弁護士や日本科学者会議福井支部の会員によって行なわれていた。だが講義担当を解任され迫害がエスカレートしたのを機に「高木秀男氏を支援する会」が結成され、まず日本科学者会議福井支部、福井大教職祖、福井工業高専教職祖、福井県高教組、北陸高校教職祖、ゆきのした文化協会、福井県民教連の7団体が団体加盟して支援する会の基礎がつくられ、その後、支援団体もどんどん増えていった。一方、東北大の同窓生が1980年9月に「高木秀男氏を支援する会(仙台)」を結成して独自の支援活動をしてくれた。そして「高木秀男氏を支援する会」の事務局長を務めてくれたのが、庄野先生であった。

1983年5月、日本学術会議学問・思想の委員会が原稿用紙百枚にのぼる学問的で詳細な見解を発表し福井工大当局を断罪した。この見解は専門誌の『季刊教育法』の1983年夏季号と秋季号に発表された。そして庄野先生が評議員となり忙しくなったころ、事務局長は坂東弘治先生にバトンタッチされた。本格的な裁判闘争に入った頃には坂東先生に大変お世話になった。1987年3月27日、福井地裁は原告が福井工大助教授の地位にあることを確認し、金井学園が原告に対してなした違法行為に対する慰謝料として100万円の支払いを命ずる判決を下した。敗訴した金井学園は控訴し、高裁で和解が成立するが、学園は和解条項を守らず私の闘いはその後も続いた。長くなるので、一審以後の詳細については『学問の自由と科学者の権利』を参照されたい。

長く「支援する会」の事務局長を務めてくれ

た坂東先生は、1989年10月1日に東大原子核研究所教授となって福井を離れたが、翌年1月6日、病気のために亡くなられた。ハイパー原子核の研究グループのリーダーとして、ますますの活躍が期待されていただけに、51歳の死はあまりにも早すぎ残念な出来事であった。

京都で行なわれた告別式には、庄野先生ら福井大学の先生たちと一緒に私も参列した。葬儀の前日に京都に着くと、突然、私にも弔辞を読んでほしいという話があった。確かに坂東先生には公私ともにお世話になったが、坂東先生を福井大学に呼んだ庄野先生が来ているのに、私ごときが弔辞を述べるなど恐れ多いので、庄野先生に福井大学の友人代表として弔辞を読むようお願いした。それで弔辞の内容については、その日の夜中に庄野先生と私で相談しながら考えた。告別式の当日には約600名の会葬者があり、山崎敏光東大原子核研究所長をはじめ6名の方が弔辞を述べられた<sup>(4)</sup>。そして今年、庄野先生も亡くなり、私は二人の恩人を失ったことになる。

#### 参考文献

- (1) 日本科学者会議福井支部『日本科学者会議福井支部20年の歩み(1971年11月～1993年4月)』(1993)
- (2) 日本科学者会議福井支部『日本科学者会議・福井支部30年の歩み(1971年11月～2001年12月)』(2001)
- (3) 高木秀男『学問の自由と科学者の権利—福井工大不当解雇事件と私大における権利闘争—』科学堂(2007)
- (4) 「坂東弘治博士追悼文集」編集世話人会準備会『QUALITY OF LIFE 坂東弘治博士追悼文集(第一部)』(1990)

- 庄野先生が『福井の科学者』に書かれた論文など
- 庄野義之「原発問題研究委員会から」『福井の科学者』1号(1973年12月)
- 庄野義之「巻頭言 原子力発電の10年とわれわれの課題」『福井の科学者』7号(1976年1月)
- 庄野義之「若狭湾の原子力発電—その10年から—」『福井の科学者』8号(1976年4月)
- 庄野義之「若狭湾の原子力発電—その10年から—II」『福井の科学者』9号(1976年7月)
- 庄野義之「解説「高速増殖炉」とは(その1)—原理について—」『福井の科学者』9号(1976年7月)
- 庄野義之「解説「高速増殖炉」とは(その2)」『福井の科学者』10号(1976年10月)
- 庄野義之「解説「高速増殖炉」とは(その3)—プルトニウムの話—」『福井の科学者』11号(1977年1月)
- 庄野義之「福井の原発を考える—福井を考える市民公開講座第3回より—」『福井の科学者』12号(1977年4月)
- 庄野義之「解説「高速増殖炉」とは(その4)—その構造I—」『福井の科学者』12号(1977年4月)
- 庄野義之「最近の原発問題から」『福井の科学者』13号(1977年7月)
- 庄野義之「解説「高速増殖炉」とは(その5)—その構造II, および問題点のまとめ—」『福井の科学者』13号(1977年7月)
- 庄野義之「解説「高速増殖炉」とは(その6)—開発体制の問題—」『福井の科学者』14号(1977年10月)
- 庄野義之「高等教育機関の現状と地方大学」『福井の科学者』17号(1978年7月)
- 庄野義之「原子力エネルギー—4つの話—」『福井の科学者』19号(1979年1月)
- 庄野義之「大飯発電所の「安全解析」についての検討の記録」『福井の科学者』22号(1979年10月)
- 庄野義之「“スリーマイル”から1年—若さの原発で何が起こったか(上)—」『福井の科学者』25号(1980年7月)
- 庄野義之「“スリーマイル”から1年—若さの原発で何が起こったか(下)—」『福井の科学者』26号(1980年10月)
- 庄野義之「若狭の原発 最近の動きから」『福井の科学者』27号(1981年1月)
- 庄野義之「公正な調査と原発誘致姿勢の転換を—敦賀原発の事故を振り返って—」『福井の科学者』29号(1981年7月)
- 庄野義之「原発問題を考えて10年」『福井の科学者』30号(1981年11月)
- 庄野義之「「原子力問題を考える会」の活動」『福井の科学者』30号(1981年11月)
- 庄野義之「高速増殖炉と核燃料サイクル」『福井の科学者』33号(1982年10月)
- 庄野義之「“福井名産? プルトニウム”の行方」『福井の科学者』41号(1985年2月)
- 庄野義之「坂東さんを偲んで—坂東さんが福井に残したもの—」『福井の科学者』57号(1990年3月)
- 庄野義之「「起こり得ない」はずの事故—関西電力美浜2号炉の蒸気発生器細管のギロチン破断—」『福井の科学者』61号(1991年8月)
- 庄野義之「いま, 福井の原発20年を問う—市民公開講座から—」『福井の科学者』64号(1992年9月)
- 庄野義之「巻頭言 生涯学習と大学」『福井の科学者』74号(1998年3月)
- 庄野義之「日本科学者会議は原子力開発についてどう考えてきたか?—支部例会での質問に答えて—」『福井の科学者』98号(2005年10月)
- 庄野義之「片隅からみてきた工学・教育そして大学—工学部での20数年の思い出—」『福井の科学者』109号(2009年7月)

## 庄野義之先生を偲んで ～ 学問の自由

山本 富士夫 (福井大学名誉教授)

庄野義之先生が、昨年末のもんじゅ集会や今春の小浜での原発集会に出て来られないのは、体調が優れないからだと思われ、奥様より聞いておりました。残念ながらお見舞いに間に合わないうちに、先生は去る6月8日に他界されてしまいました。通夜の席では、いろんなことが思い出され、巨星が福井の空から落ちたと通感しました。

先生は、原子核物理学者で若くして顕著な業績をあげられましたが、工学部では数学教育を担当されました。先生は、福井大学に着任されて以来、ずっと日本科学者会議原子力発電問題研究委員会で活躍されました。先生は理学者でしたが、工学という学問は、単なる理学の応用でないこと、それは技術を対象とする独立した学問であることを理解されるようになりました。

先生が工学部長を4年間務める間に、工学部出身の他大学の工学部長らとの討論においても、独自の工学教育・研究の将来像を描くことがで

きたと、自負しておられたことを思い出します。

現在の大学は学問の自由の権利(憲法23条)を忘れかかっていますが、先生は産学連携を強化することを支援されるとともに、「産学連携を進める中で、しっかり学問研究を進め研究発表の自由が保障されるべきだ」と注文を付けられました。このことは大学の使命の根幹に関わっていると思われ、今、先生がご存命であれば、軍学共同研究さえも容認しかねない日本学術会議の変革をきつと嘆き憤慨されると思います。

権力に追従する御用学者がはびこる中、雑用に忙殺され自主自律の発言を自重する大学人のなんと多いことか！学問の自由を尊重し護ろうとされた庄野先生を偲ぶことは、今正に時宜を得ていると思います。

2016年8月22日

## 庄野義之氏を偲んで

隼 田 嘉 彦 (福井大学名誉教授)

去る6月8日、庄野義之氏がお亡くなりになった。心から御冥福をお祈りする。85才だから、お年に不足はないとはいえ、やはりもう少しお話を聞きしておきたかったと思う。

略歴を拝見すると、大学院の最後の2年ほどが広島大学で重なるようであるが、無論そのころは何の関係もなく、初めてお目に掛かったのは福井に来た直後である。その頃日々お世話になっていた、東洋史の影山剛先生が入院されたのでお見舞いしたところ、先客で居られたのが松尾斗五郎先生と庄野さんであった。その後松尾先生とは通勤電車で時々お話しするようになるが、庄野さんとはほとんどそのような機会のないまま推移していた。

私は福井に来るまで、「日本科学者会議」なるものを全く知らず、組合にも縁がなかったが、組合はすぐ勧誘されたので加入した。科学者会議の方は、そもそも自分を「科学者」とは思ってもいなかったのだから、ピラなどは見た筈であるが、無縁の組織として何の注意も払うことがなかった。特にそのころの福井大学は、棲み分けというか分業というか、科学者会議は工学部が引き受け、教育学部は組合を担当するといった雰囲気があったので、講演会や集会には行ったのだろうが、ほとんど関係がなかった（「三者」

といて、この二つに教育学部の助講会が加わって活動するのはもう少し後である）。

そのうち集会や講演会に出ると、ほとんど庄野さんも参加しておられ、少しずつお話しするようになり、学内の諸会議で御一緒する機会も増えて、親しくお話しすることも多くなった。そのようななかで感じたのは、発言が常に笑みを浮かべながらも、非常に説得的であることで、見習いたいと思ったがなかなかできることはなかった。

定年後も年に何回かは科学者会議などで御一緒することが続いていたから、このように早くお別れするとは思ってもみなかった。誠に残念というほかはない。御遺族の末永い御多幸をお祈りするばかりである。

最後に一つのエピソードを紹介する。ある時「これを読んでみないか」といって、石光真清<sup>まきよ</sup>『城下の人』（本人の手記）を貸与された。真清は福岡出身の陸軍少佐、諜報などに従事した、なかなかの「快男子」であった。お返しするときその旨を申し上げると、「実は大伯父なんだ」といわれたので、「道理で、先生にもこの人の血がかなり伝わっていますね」というと、「そうでもないよ」といいながらも、ニヤリとされたのが極めて印象的であった。

## 庄野義之先生のご冥福をお祈りします

寺岡英男 (福井大学国際地域学部)

中国出張中に森さんから、庄野先生の具合が良くないと連絡があり、帰福後、病院にお見舞いに伺いましたが、それがお目にかかれた最後となりました。

私が福井大学に勤めて40年経ちます。見ず知らずの地でしたが、私の母校である北大の学部・大学院の指導教員から、庄野先生、下田屋先生がおられることを福井に来るとき、聞いていました。庄野先生と私の指導教員は、北大理学部の物理学教室で「場の量子論」その後「原子核」の研究グループの仲間でした。

福井大学に来たとき、庄野先生は科学者会議の立場から原発反対県民会議の中心メンバーとして活躍されていました。「自分は必ずしも専門ではないのだけれど」と言われながら取組んでおられたのが印象に残っています。「高木先生を支援する会」などで、よく工学部の共通講座のコロキウム室に伺わせていただきました。同じ講座の長谷川先生や坂東先生も出入され、コロキウム室の自由なたまり場的な雰囲気は好きな場所でした。

庄野先生の印象は、よく歩かれていたということ。専門や年齢に拘らず、人を訪ねて

交流し、議論をし、幅広い観点からよく考えておられました。工学部長になられたときも、厄介な管理職をこなすという大変さや気負いというものをあまり感じさせることなく、むしろ工学部教育のあり方を、大学改革との関わりの中で、しかも工学プロパーの方とはまた違う観点から捉えなおされ、生き生きと改革に取り組まれておられていたように感じていました。退職された後初代の放送大学福井学習センター長になられたときも、福井センターの教育を充実させるため、医学部を含めいろいろな研究室を訪問し、専門の研究等の聞き歩きをされておられたようで、ときどき聞かれた内容など伺うこともありました。

その後フリーになられてからも福井大学のキャンパスで、水筒を入れたバックを肩にかけ歩いておられる姿をよくお見かけしました。先生がコーディネーター役で、学内で数名が参加し、大学や教育についての研究会も持たれました。それなりに続きましたが、それも、それぞれが多忙となり、自然消滅になってしまったのが残念です。

どうぞ安らかにお眠りください。

## 庄野先生を偲んで

森

透 (福井医療短期大学・JSA 福井支部事務局)

JSA 福井支部ニュース第2号 (2016年9月10日発行) の庄野先生追悼特集の最後の「編集後記」に、以下のように書かせていただきました。

### <編集後記>

去る6月8日にご逝去された庄野義之先生の追悼特集を発行することは非常に悲しいことですが、先生の歩みを皆さんとともに共有できればと思います。ここに発行致します。先日の福井支部の常任幹事会で、支部ニュースで「追悼特集」を組んだらどうかという提案が出され、なんとか発行したいと思い、関係の皆さまへ原稿の依頼メールを出しました。今回5名の方々を追悼原稿を寄せてくださいました。お忙しい中での寄稿に心より感謝します。特に広島の滝先生にはお忙しい中でしたが、深く感謝致します。私も庄野先生とは長いおつきあいをさせていただいてきました。病院へのお見舞の時に、先生が笑いながらも気丈に、いつまで頑張れるかなとお話しされていたことを思い出します。病室での奥様の温かい心遣いにも深く感謝します。先生はいつも穏やかで、しかも理知的でした。心より哀悼の意をささげます。安らかにお眠り下さい。(森)

私がJSA 福井支部に入会したのは1985年9月に福井大学に着任してからで、身近におられた寺岡先生から入会を勧められたのではないかと思います。当時のJSAの会議は工学部の応用物理学科の会議室を使わせていただき、教育棟からは少し離れた工学部の一番奥の2階でした。その会議室は談話室風で、ゆったりといろいろなお話ができたように思います。その応用物理学科にいつも庄野先生はおられました。私の印象は、いつも笑顔を絶やさず、ゆったりとして、しかしテーマによっては熱く持論を展開される方、というものでした。持論を展開する場合でも、意見の違う相手を頭から否定せずに配慮をしながら発言されていたように記憶しています。そのあたりの温かく回りを包み込む雰囲気は、理学部ご出身で社会科学にも造詣が深い先生のお人柄だと思いました。工学部長を務められたのも、学部からの熱い信頼があったことだと確信します。

このたびは本当に悲しいことですが、病院へお見舞いに行き病床で頑張っておられる先生とご対面ができたことを心より嬉しく思います。先生のご遺志を受け継ぎ、JSA 福井支部を継続・発展させるべく、微力ながら進んでいきたいと思えます。

庄野先生、安らかにお眠り下さい。

(2016年11月14日記)

## 原発反対運動に尽力された庄野先生

滝 史 郎 (広島大学名誉教授)

庄野先生の訃報を聞き、書庫の隅にあったゆきのした叢書『父と子の原発ノート』を思い出した。開いてみると40年程前の庄野先生の姿が浮かんでくる。思えば福井大学へ赴任してまもなく、私は日本科学者会議福井支部の事務局を庄野先生から引き継いだ。といっても私は何もわからず、すべて聞いて行うしかない。1973年の第2回全国原発シンポの若狭での開催直後であり、嶺南の住民団体関係者へ新任の挨拶に行けということで、私は車で庄野先生と一緒に回った。当時の白木の集落の様子も忘れられない。私は原発について知識も無い頼りない後継者であったが、『父と子の原発ノー

ト』に書かれた父が子に語るように教えていただいた。核エネルギーに関する歴史的社会的背景を少し知ることができ、原発問題は日本社会の縮図のように思えた。庄野先生はよく「科学者の社会的責任」を口にしておられた。核分裂連鎖反応の発見からわずかの日時うちに、原子爆弾が製造され悪夢が作り出されてしまった。このことを庄野先生は物理学者として深刻に受け止めておられたように思う。そして自然の認識論について常に関心を払っておられたが、自分には哲学的素地がなく聞く機会を失したのを今も残念に思っている。

## 「小沼丹」の余白へ

屋敷 紘 美 (日本科学者会議福井支部)

連れ合いが、本を読みながらクスクス笑っている。いつもの彼女の癖だ。唐突に早稲田のキャンパス周辺の蕎麦屋の話をし始めた。文学部から本校舎へ行く早稲田通りの角に「三朝庵」という蕎麦屋があった。3年ほど前に用があって久しぶりに大学に行ったが「三朝庵」は健在であった。当時僕のような貧乏学生には少し敷居の高い店で、そこに入る時は彼女（今の連れ合い）の財布が頼りだった。訝る僕に連れ合いが「寄こした本にこうあった。」

「この1月、学校に出た日、教室から研究室に戻って来たら扉に小さな紙片が釘で留めてある。穴八幡迄家内と参詣に来た序に寄ってみたが、授業中らしいので帰ると云う意味のことが書いてあって庄野の名前があった。（しばらくして一筆者）扉を叩く音がして、庄野夫妻が現われた。学校の傍の三朝庵と云う蕎麦屋へ行っ  
て・・・」（「庄野のこと」1974年3月）

書名は『小さな手／珈琲挽き』（みすず書房刊）、作者は小沼丹<sup>おぬまたん</sup>。庄野と云うのは庄野潤三。小沼の死後、親友の庄野潤三が編纂したエッセー集だ。

その後に続く文。

「古本屋を見て歩いて、高田馬場駅近くの喫茶店で休憩して帰るのだそうである。」

「四、五日して庄野から葉書が来た。『あれから古本屋を少し覗いて、〈ユタ〉で家内にホットケーキを食べさせ・・・。』」

ところが驚いたことに、少し長い、鉛筆書きの書き込みが小さい字でびっしりと余白を埋めている。〈ユタ〉という喫茶店のことだろう。

「JR 高田馬場近くの喫茶店で添えて出される

生クリームが美味しく、もうひとつ何時訪れてもオーナーが柔かな笑顔で出迎えており、それもお店の魅力になっていた。大学在学時にはかなり繁盛していたが、ネットで近況を調べたら閉店している旨、ある個人のブログに記載されていた。親しみやすい、とても雰囲気の良い店だったが、これも時代の趨勢なのだろうか。」

この本の出版が2002年だから、書き込みはそれ以降である。

書き込み氏は小沼の文章を読んで、時代と経験を共有した者として書かずにいられなかったのだろうか。僕の脳裏にも三朝庵や早稲田から高田馬場へ行く道筋にある古本屋街のことが瞬く間に浮かんで来る。あそこでAALA（アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会）関係の本を一冊失敬したのだった（そのことは良心にトゲとして刺さっていて今でも時々僕を悩ます）。〈ユタ〉は知らないが、本部キャンパス裏の〈クレバス〉が僕らのサークルのたまり場だった。彼女とのデートは新宿歌舞伎町の紀伊国屋書店の横にあった〈カトレア〉だった等など。この喫茶店は今でもある。ちなみに穴八幡は文学部キャンパスの道を挟んで高田の馬場よりあって、僕もよくお参りした。古い社殿や石畳の参道、縁の擦り切れた御手洗の石鉢など、何となく子供の頃の故郷の雰囲気を持っていたからかもしれない。心安らぐスポットではあった。しかし、大学に行った序に、50年ぶりで見えた穴八幡は当時とは似ても似つかぬ、朱色の山門、荘厳きらびやかな社殿など一分の隙もない【高度成長】を遂げていた。その時は思い出の地に再訪するものではない、と苦々しい想い

だけが残った記憶がある。

「昔は荻窪ばかりではない、あちこちに何とか横丁と名前の附いた露地があって、小さな飲み屋が並んでいたが、近頃は殆ど見掛けない。北口駅前の一画も長いこと行かなかったから……」 (「後家横丁」1975年11月) 余白の書き込み氏の回想。

「70年代には荻窪北口は駅と広場(広場と言ってもきわめて狭いが)の両側には商店や居酒屋、スナックなどが混在する商業ゾーン(焼け跡闇市の名残り)があって、新宿のシヨンベン横丁と並んで独特の佇まいを呈していたが、近年跡形もなく再開発され、どこにでもある街並みに変わってしまっている。」

僕は、荻窪は殆ど知らないが、新宿は少しは知っている。小沼の別の1篇「昔の西口」では「当時は西口に淀橋浄水場があったわけだが……」とある。たしかに西口には浄水場があって、夜は薄暗い所であった。たしか、工学院大学は西口にあったのではないかと記憶する。今は東京都庁など高層ビルが林立しているのは承知の通りだ。

僕の所属するサークルの行きつけの飲み屋は山手線新宿駅近くのガード下にあった。大和屋と云った。カウンターだけの狭い店だったと思う。早慶戦の後など必ず押しかけた。勿論その後の日々は、父が送ってくれていたインスタントラーメンに卵を入れるだけの食事が続いたが、「戦争が終わって暫く経った頃だと思ふが或る日、井伏さんのお宅へ伺ったら、先客が一人あった……  
—誰方ですか?  
と井伏さんに訊くと、  
—裕さんだよ、画家の裕伊之助だ……  
と云ふ返事で、二度吃驚した。」

(「古いランプ」1988年3月)

この1篇には書き込み氏の文はないが、僕が

書き込みたいことがある。

小沼は自分が住んでいた帝都線三鷹駅周辺のアパート近くで、風変わりな夫婦を気に留めていた。男は鼻下に口髭を蓄えた四十恰好の温和しそうな人物だったが、女の方は丸ぼちゃのかわいらしい金髪女性である。その男の方を自分の師匠である井伏鱒二の自宅で見掛けて吃驚しているのだ。

僕はその画家の<sup>はざま</sup>裕伊之助の絵をよく観に行っていた。彼は1885年から1977年まで生きた画家で、記念美術館が石川県加賀市にある。名勝加佐の岬の入り口近くである。僕らはよく裕の絵を見に行つて隣の喫茶店のテラスでコーヒーを飲むのを常としてきた。

庄野さんはこの本の最後に「なつかしい思いで」というあとがきを書いている。

「小沼とは一緒に旅行したこともある……私が声をかけると、小沼は秋に早稲田祭と云うのがあって、一週間休みになる、その時に連れて行ってくれという。」

確かに早稲田祭は準備期間を入れると一週間ほどあったかもしれない。僕の所属したサークルは東南アジア研究会と言って、そこを起点にインドネシアなどへ長期滞在する学生などがいた。僕は専攻が中国近代史であったが、周辺史としてヴェトナムの民族解放運動を調べていた。始まったばかりの中国文化革命も懸命に追いかけた記憶がある。当時早稲田には中国から帰国して間もない安藤彦太郎という法学部の教授がいて、文革支持の立場でさかんに論陣を張っていた。同じ研究室に新島淳良という中国語学の教授もいて、彼は後の「四人組」の一人張春橋が展開した「上海コミューン」を評価していた。僕ら中国近代史を専攻する学生は、二人から大きな影響を受けた。僕は中でも新島先生の「コンミュン論」に多大な影響を受けたと思う。とにかく二人の教授は新しい世界や中国の「壮

大な社会実験」への限りない共感を語って、それが聞く側の僕らに直接響いてきたのは事実なのだ。文革が必ずしも彼らのいう方向には向かわなかったし、むしろその「実験」の結果は無残なものに終わったことは歴史的事実であったとしても、当時の若い人たちに世の中を変えられるという展望を与えたことも実体験として感じている、今も、早稲田祭にはこの祭りのためにテーマを決めて、それぞれの調査研究の成果を展示したのだが、与えられた部屋の壁面に隙間なく文字が並ぶという景観であった。訪れた学生などと、激しく主としてヴェトナム戦争の議論をやった記憶がある。ともあれ、早稲田祭は小沼さんと違って僕にとっては『休み』という感覚ばかりではなかった。

ところで、書き込み氏の時代が僕らとほとんど重なるとして、氏は男か女かが連れ合いと議論になった。僕は女文字だと考えたが、他にたくさんある書き込みから見える行動範囲から男だというのが連れ合いの言い分であった。

僕が「彼」を真似て書き込むとしたら、小沼の次の文だろう。

「障子に映る樹立の影を見てみると、古い記憶が思ひ掛けなく顔を出すことがある。それは障子に映って消える小鳥の影のやうに、心の窓を掠めて消えて行く。」

(「障子に映る影」1971年11月)

「人の書いたものに触発されて、思いがけない自分の過去が突然意識の底から這いあがってくる。それはたいてい舌打ちするような苦い想いと共である。愉快的、自信に満ちた過去はいつも意識の表で陽が当たっていて、時として自分を尊大不遜な人間にしてしまう。苦い過去はそういう自分に改めて背筋を正す縁を与えてくれる」と。

\*\*\*\*\*

この際、庄野潤三という作家にも少し触れて

おきたい。

わが家では庄野潤三さんという作家を読み繋いできた。最初は僕が日々の緊張感から逃げ出すために選んだ作家だった。正直、第1次戦後派やそれに直接連なる高橋和己・大江健三郎は読むのにかなりの忍耐がいる。庄野さんは、そんな理由で少し寄り道をする気分です手を出した作家だ。たぶん彼が単行本として出したものは殆どわが家にあるだろう。断っておくが、その理由が決して庄野文学を<sup>おとし</sup>貶めることにはならない。その後庄野さんが死ぬまで僕ら家族は彼の書く物を読んできた。好きな作家だった。庄野さんは次に連れ合いを虜にした。特に夫婦を中心とした家族の何でもない日常を、とりとめもなく淡々と綴った「生田の丘」物は新刊が出るのを待って買い込んだ。娘は小さいころから身近に庄野さんの本があり、親たちが話題にするせいもあってか、ついには大学の卒論のテーマに選ぶことに行き着いた。彼女の時代は「ムラカミハルキ」の時代で、彼女もよく読んでいたのにである。

閑話休題：僕は村上の無国籍性がどうも肌に合わない。彼が何時までもノーベル賞をとれないのはこの為ではないかと秘かに考えている。最近のノーベル賞は作品の土俗性とその中に通底する普遍性を評価する傾向があるように思う。ガルシア・マルケス、バルガス・リョサ、スベトラーナ・アレクシエーヴィチ、大江健三郎など。

連れ合いは嵩じて、庄野に手紙まで出した。

作家としての小沼丹に興味を持った淵源を辿れば、この時、連れ合いに届いた庄野さんの返事にあるのかも知れない。

「小沼のこと、なつかしいです。」

小沼丹という小説家は、同時に僕の母校早稲田の文学部の英語の先生でもあった。僕ら(連れ合いと僕)は彼の講義を2年の時に第2英語で受講した。連れ合いの庄野さんへの手紙は、

当時—1965～66年の小沼教授の印象などを綴ったものであった。しかし今でこそ「なつかしい」が、先生の当時の印象はそれほど深くはない。何しろ毎日がデモと集会で僕らの関心も授業にはなかったから。しかし薄い印象は僕らのせいばかりではないらしい。「そして、その頃、文学部のなかに作家がいるそうだと話に聞いたのである。

『へーえ、誰?』

『小沼丹』

『知らんなあ』

.....

『それで、どんな人』

『うん、それがなんだかあんまり面白くもない普通の人のな』

『授業は?』

『ただリーダーを読んでください、発音も下手』

『ふーん』

『そう。これが作家か、って思うだけ』

『つまらんな』

だが、誰か一人くらいがこうも付け加えた。

『ただね、なんとなくどっか超然としたようなところがあって、他の先生とは一風違う感じもあるのよ』

これは、やはり文学部の学生であつたらしい、夫馬基彦<sup>ふま</sup>という作家が『小沼丹全集』第2巻月報に書いた「小沼さんと大学の先生」というエッセーである。僕の小沼先生の印象も寸分違わぬものである。夫馬という作家についてはまったく知識がないが、1943年生まれと云うから僕と同世代であり、在学が重なったかも知れない。彼は仏文という。ちなみに僕らの受けた小沼教授の授業のリーダーはチェホフの「アンクル・ワーニャ」で、先生に指名されて学生が訳するというものであり、結構緊張した記憶がある。

『小沼丹全集』第4巻の巻末の年譜によれば、1954年の項に「忍川」で芥川賞をとった三浦

哲郎が、この年小沼の英語の授業を受講している。彼によれば小沼助教授(36歳)は「縮れ気味の豊かな髪が天を指すが如き精悍な風貌をしていた」という。僕らが受講生だった1965～66年は48～49歳で、夫馬氏の印象の通りであった。机に肘をつけて片足を椅子の上に乗せるといった格好であった。1963年奥さんの和子さんが急死。翌64年ごろから「次第につくりものとしての小説に対する興味が薄れ、身辺に材をとった作品に気持ちが動く」ようになったという。三浦哲郎と僕らの世代の小沼の印象が違うにはこうした小沼の個人的事情も背景にあるだろう。

あとがき

これまで親しんできた作家が死亡したり、生きていてもほとんど作品を書かなくなってしまった。第1次戦後派(野間宏、椎名隣三ら)、第3の新人(庄野さんも小沼丹もこの派に分類される)、内向の世代(黒井千次、小川国夫、日野啓三ら)、開高健等々。大江健三郎も「最後の小説」を書いてしまったという。僕は今や手持無沙汰である。勿論再読すればいいのだけれど、生きている作家でないと呼吸が合わない気がする。

今回、小沼丹の『小さな手／珈琲挽き』を読んで、そこに「書き込み」氏の少し鼻持ちならないものもあったにしろ20カ所近い書き込みを合わせ読んで、とても面白かった。彼の書きこみも含めての作品『小さな手／珈琲挽き』だとさえ思った。そして両者の文章に自分の過去が次々と思い出されて、僕も「書き込み」氏に倣って書き込んでみたいという衝動を抑えきれなかった。誰も人の懐古譚など読みたくないだろうけれども.....

それにしても不思議な読書体験であった。そして読み方を変えれば、再読も新鮮な発見があ

るかもしれないと考えるようになった。当面は庄野さんや小沼丹を漁ってみようと思う。

後日談：この小品は市立図書館で借りたものだが、手放すのが惜しいと思って、図書館の窓口で「同じ本を探してくるから、この本をそれと交換してくれないか」と冗戯に等しいお願いを女性職員にしてみた。彼女の答えは「できません。書き込みも不愉快に思う人もおられるから消します」とにべもなかった。

(2016年10月30日)

## 学生運動の源流「東京帝国大学新人会」 —第1回 大正デモクラシーと東京帝大新人会の結成—

高木 秀 男 (日本科学者会議福井支部)

### 1. はじめに

ここ20年ほどの日本は、「学生運動不在の時代」であった。「60年安保」の年に大学に入り、1960年代末の大学紛争を経験した筆者には、現在の「きれいで、静かな大学」をみると、まったく隔世の感がある。学生運動の衰退や不在が、現在の大学の崩壊・頹廃・退嬰たいえいをもたらした一因と言えよう。

国民の側からの本質的な批判の欠如という状況下で、大学に対する批判には学内の学生運動と文科省からの「指導」という名の外圧の二つがある。だが学生運動が見られない現況の一方で、国からの圧力は確実に大学を変えてきたし、現在も大学を変える現実的な・最も強力な作用として有効に機能し続けている。60年代の高度成長期の「科学技術立国」の国是に基づく大学の理工系分野の大拡張、その後の総合大学院・学部改組・教員免許必要単位数の増強・その他の制度上の数々の変更や「弾力化」、90年代前半の全国一斉に行なわれた教養教育の解体と改組・大学における学問的体系の制度的破壊、そしてそれらの総仕上げとも言うべき大学の法人化、これらの現実に行なわれたすべての「改革」は文部省(文科省)の主導で行なわれたものである<sup>(1)</sup>。

この勝木渥の主張に私もまったく同感であり、大学法人化後の現在は前から予想されたごとく事態が改善されないばかりでなく、さらに悪化している。大学の管理運営は上意下達となり、教授会は伝達機関化し、学内民主主義は失われて教員は口をつぐみ、今や大学は期待されている社会的な機能・責任を十分果たすことが

難しい状態にある<sup>(2)</sup>。その意味で大学は今や「死に体」の状態にあるといっても過言ではない。これは第一には大学教職員の責任であり、大学の構成員たる学生・院生の責任でもある。そして大学人と共闘できなかった科学者・知識人もその社会的責任を問われよう。若者が委縮している時代は社会が病んでいる時代であり、若い世代が発言できる環境をつくることは、大学人や知識人の責務である。

### 2. 新しい学生運動の始動

非常に長い学生運動の停滞期を経て、最近ようやく秘密保護法や「戦争法」の制定に危機感を覚えた学生たちが声をあげ始めた。それがシールズ(自由と民主主義のための学生緊急活動)の学生たちで、国会前で大規模な運動を展開し、シールズの代表は国会にも呼ばれて発言した。やっといま学生運動に明るい光が見え始めたといえる。そんなおり、私は日本科学者会議電気通信研究所分会機関誌『新しい風』532号に、「シールズの学生が卒業式で表彰される—そのスピーチを紹介します—」<sup>(3)</sup>という記事を見た。

そこには『しんぶん赤旗』2016年3月26日号の「まど」というコラムが紹介されていた。それによると、東京都内の私立大学(国際基督教大学)の卒業式で一人の女子学生が表彰されたという。それは顕著な活躍が認められた学生などに贈られる賞で、卒業生2名に贈られた中の1名である。授賞理由は「政治を考え行動する学生団体においてスピーチなどの活動を通して、民主主義のあり方や平和について訴え、そ

れらを真剣に考える潮流を生み出すことに多大に貢献した。この民主主義、平和、人権を尊重する行動はまさに本学の建学の理念を体現するものであり、賞賛に値する」というものであった。

国際基督教大学4年生だったシールズの栗栖由喜さんが、新宿の歩行者天国での「学者と学生が主催する集会」で行なったすばらしいスピーチは、ネットのユーチューブで流され評判を呼んだ。彼女は、「今の私たちにとって安倍首相が一番の脅威。私は殺すためではなく、よりよく生きるために生まれてきたのです。私が奨学金で何百万と借金しながら学んだのは、抑圧者の権力とたたかう知性です」とスピーチした。『新しい風』には、このスピーチをユーチューブから起こして全文が掲載されていた。

このようにスピーチした学生を賞賛して卒業式に表彰した国際基督教大学は、まことに立派で日本の大学史、教育史に記録しておきたいと思ふ。学生運動をしたために学校から処分された例はいくらでもあるが、学生の行動を正しく評価し大学が表彰した例は聞いたことがないからである。シールズは2016年8月15日に解散したが、衆参両議院で改憲勢力が3分の2以上となり、日本国憲法の危機が現実のものとなった今日、憲法改悪阻止のための新たな学生組織の結成を期待したい<sup>(4)</sup>。

### 3. 大正デモクラシーと「東京帝大新人会」

さて、1969年1月18日、東京大学の象徴である安田講堂は早朝より大量動員された警察の機動隊に包囲されていた。機動隊は、前年より講堂を占拠していた東大全共闘および過激派の学生を強制的に排除するべく攻撃を始めていた。空にはヘリコプターが飛び交い、ポンプ車と催涙弾で講堂は文字通り水と煙につつまれ、まるで戦場のような様相を呈していた。その様子はテレビでもセンセーショナルに報じられた。

この時期、全国的な学園紛争で多くの大学が全共闘系の過激派学生によって封鎖されたが、その象徴ともいえる東大安田講堂がこの日落城した。まさにこの日に東大構内に全国から90名近い老人が集まり、日本最初の学生運動団体であった「東京帝国大学新人会」の創立50周年集会が開かれたのである。東大構内は騒然としていたため、会場は当初予定していた東大内の山上御殿から急遽<sup>やまのうえ</sup>学士会館に移された。新人会は1918年12月7日、東京帝大法科大学の学生であった宮崎龍介、赤松克麿、石渡春雄によって、古い社会に訣別して新しい人間たることを宣言してつくられた学生団体である。

以下、日本における学生運動の源流ともいうべき新人会の歴史を、スミスの『新人会の研究』<sup>(5)</sup>、石堂清倫・堅山利忠編『東京帝大新人会の記録』<sup>(6)</sup>、中村勝範編『帝大新人会研究』<sup>(7)</sup>、佐々木敏二の論文「新人会（前期）」の活動と思想<sup>(8)</sup>などを参考にして紹介しよう。

新人会結成以前に学生の政治活動がまったくなかったわけではないが、永続的な組織活動にまで発展したものはそれまでなかった。その意味で新人会はその後の学生運動に大きな影響を与えた団体である。明治時代の学生の政治活動は、1880年代の自由民権運動と1904年から翌年にかけての日露戦争当時の社会主義運動に集中していた。

1900年代に入ると、私立の法律学校などがたくさん作られ東京の学生数は飛躍的に増加し、学生は政治的には次第に先鋭化していった。1901年12月には、千人もの学生が栃木県の足尾銅山に向かい、当時重大な社会問題となっていた足尾銅山鉍毒事件の調査を行なっている。2年後に、社会主義運動史上はじめての機関紙である週刊『平民新聞』が創刊され、対露開戦に反対の論陣をはったとき、その主要な支持者となったのは学生たちであった。

そして1903年11月22日、社会主義者のみを会員とする「早稲田社会学会」が結成されている。この会は短命に終わったが、社会主義に関する月例講演会を行ない、第一次世界大戦が起きた1904年には、早稲田大学において反戦の宣伝活動を活発に行なった。1906年には日本最初の社会主義政党である日本社会党が誕生したが、党員には多くの学生が含まれていたという。一方、明治政府は学生の政治運動参加を敵視し、学校当局に厳重な処分を要求する警告をしばしば発した。そして1880年に出された集会条例には、その第7条に公立私立を問わず、教師および学生は政治集会出席および政党参加を禁止し、違反したのものには罰金刑を課すと明記された<sup>(5)</sup>。

第一次世界大戦がもたらした自由主義的風潮は、体制の改革をめざす大正デモクラシー運動を鼓舞した。この運動の背後には、強い影響力をもった大学教授の団があり、個々の改革要求に理論づけを行なった。大正デモクラットの新味は、その思想を唱えるために新聞・雑誌、たとえば『中外』『大阪朝日新聞』『中央公論』などをはじめ広くメディアを使ったことである。河上肇の有名な『貧乏物語』は、1916年に『大阪朝日新聞』に連載されたものである。

日本の大学制度は、その起源からいって社会のためではなく国家のために設けられたものであった。だから明治時代を通じて、大学の最大の機能は、民衆の福祉のためではなく国家の繁栄をおしすすめるための専門家の養成にあった。それゆえ明治文学に描かれた学生の典型的なタイプは、ひたすら官僚として立身出世をめざす学生であった。だが明治末期になると、自分の出世より社会問題に目をむける新しいタイプの学生が現われ始めた。

当時の重要な社会問題に関連して大学と社会の関係をもっとも明瞭に論じ、「大学普及」を

提唱した大学教授は吉野作造であった。彼は京都帝大教授の佐々木惣一と相談し、友人を集めて1915年2月25日に「大学普及会」を設立し、6月には『国民講壇』という雑誌を創刊した。吉野がはじめて民本主義論を発表したのはこの雑誌であり、その後『中央公論』で詳しく展開し、後に彼は「デモクラシーの使徒」と呼ばれるようになった。『国民講壇』は財政上の理由で1915年9月に第6号を発行して廃刊となったが、この雑誌が提唱した精神は人気のある総合雑誌に引き継がれた。また大学普及会の活動自体は、東京帝大のキリスト教徒の学生の手で始められた雑誌『大学評論』(1917年1月創刊)によって若い世代に引き継がれた。その代表は法学部3年生で後に衆議院議長となる星島二郎<sup>にろう</sup>であった<sup>(5)</sup>。

知識人を対象にした『大学評論』は、当時の有名な大学教授の政治・社会問題についての論文を掲載して、大正デモクラシーの推進に寄与した。寄稿者にはクリスチャンが多く、日本のクリスチャンが大正デモクラシーに占めた重要な地位を反映している。麻生久の小説『黎明』<sup>(9)</sup>によれば、新人会の創設者たちははじめ『大学評論』を新人会の機関誌にする希望をもっていたが、星島は自分の雑誌を新人会に渡すことをいやがっていたという。だが彼は、結局、新人会の機関誌『デモクラシイ』に出資し、その発行名義人として『大学評論』の編集者・信定瀧太郎の名を出すことに同意したという。なお、「大学普及会」、『国民講壇』、『大学評論』が大正デモクラシーに果たした役割については、太田雅夫の『大正デモクラシー研究』<sup>(10)</sup>に詳細に触れられているので参照されたい。

吉野作造らが新しい政治思想を広めようとしていたころ、東京や京都の「友愛会」の若い知識人グループは一步すすんだ活動を行っていた。友愛会は1912年8月1日に鈴木文治らが

財界の澁澤栄一の援助を得て結成された労働団体である。結成当時は労働組合というより性格は共済組合であったが、次第に労働組合としての性格が強くなり、1919年には大日本労働総同盟友愛会となり、1921年には日本労働総同盟と改称された。彼らは上から民衆に説くよりは人民のなかに入るべきだと考え、労働者階級と直接接触するようつとめた。東京でもっとも影響力のあったのは、1914年、大学在学中に友愛会に参加した慶應義塾大学の野坂参三・早稲田大学の久留弘三・日本大学の酒井亀作の3人である。彼らは卒業と同時に友愛会の専従となり、労働者出身の平沢計七<sup>(11)</sup>らとともに創立以来友愛会を支配していた温情主義的労使協調路線に反対する運動を起こした。

野坂らは学生と青年労働者をむすびつける組織として「労学会」なるものを立ち上げ、会長には鈴木文治<sup>ふみはる</sup>をすえ、副会長には早大教授の北沢新次郎を選んだ。「労学会」の滑り出しは好調で、研究集会には百人以上の人が集まり、労働者では山本懸蔵、学生では麻生久・赤松克麿などが直接・間接に関係をもった。京都でも河上肇の影響もあって学生の友愛会参加が見られた。友愛会京都支部が創立されたのは1918年で、2年足らずの間に会員は2,000名に達した。その指導者の一人が、戦後京都市長になった京都帝大出身の高山義三であった。友愛会京都支部では労働者と学生の会合がしばしば行なわれ、1918年9月には労働者20名ほどと学生10名ほどが集まり「労学会」が組織された。参加学生のなかには高山義三、古市春彦、水谷長三郎、小林輝次らがいた<sup>(12)</sup>。

1918年当時、『東京日日新聞』の新参記者であった麻生久のまわりに、東京帝大を卒業した山名義鶴、棚橋小虎、岡上守道らがあつまり青年グループができていた。1918年秋、東京帝大法学部の学生のなかでも、いくつかのグルー

プに麻生グループと同様の動きがあった。吉野作造のところに集まった「普通選挙研究会」のグループ、東京帝大学生基督教青年会のグループ、そして新人会結成の音頭をとることになる法学部の緑会弁論部のグループがそれである。弁論部の部長を務めていた吉野は、部の学生委員を各高校から1名ずつ指名した。それは宮崎龍介（一高）、鈴木義男（二高）、赤松克麿（三高）、野中徹也（四高）、石渡春雄（七高）、福田啓二郎（八高）であった。

赤松克麿の父は、西本願寺執行長の息子であったにもかかわらず、僧籍を脱して孤児院の設立・免囚保護・被差別部落民救済などの社会事業に献身した。弟の赤松五百麿は河上肇の弟子であったし、赤松の妹の赤松常子は婦人労働運動の指導者で、戦後は日本社会党の参議院議員となった。赤松克麿自身は三高弁論部で活躍し、吉野作造の次女・明子と結婚した。宮崎龍介は中国の政治家・孫文の盟友・宮崎滔天<sup>とうてん</sup>の息子で、その兄弟には政治・社会運動に携わった者が多い。宮崎はまた大正天皇の従妹の歌人・柳原白蓮との恋愛事件でも知られている。石渡春雄は被差別部落出身から東京帝大生にまでのぼりつめた稀有の人物であった。いずれも家庭環境から社会的・政治的改革へ関心をもつようになったことが推察される。

新人会は第一次世界大戦とデモクラシーの思潮を背景として生まれた。新人会結成前後の時期は、デモクラシーの政治的発現としての普通選挙要求の声が高く、普選獲得運動は知識人や一部政治家による啓蒙運動の域を超え、民衆運動としての性格を帯びようになっていた。このような政治的・社会的環境のなかで吉野作造のもとに生まれたのが普選研究会であった。赤松克麿、宮崎龍介、石渡春雄は普選研究会の発起者であり、やがて3人は普選研究会を新人会に移行させる主役となった。

そして実際に新人会結成のきっかけとなった一つの出来事は、1918年10月27日に京都市会議事堂で開かれた東京・京都両帝大弁論部による恒例の連合演説会で、演題は次のようなものであった<sup>(8)</sup>。

開会の辞

京都帝大教授 佐々木惣一  
大和民族の危機

東京帝大 宮崎 龍介  
世界の大乱と日本の経済

京都帝大 津田 元一  
大学の本质

京都帝大教授 <sup>てるみち</sup> 曄道 文藝  
如何に進むべきか

東京帝大 赤松 克麿  
青年立国論

京都帝大 田万 清臣  
生命の脅威

東京帝大 野中 徹也  
講和問題

京都帝大教授 吉野 作造

連合演説会では、東大側は京大側から象牙の塔から抜け切れぬ態度を批判され強いショックを受けて帰郷した。京大側が前月に「労学会」を結成していたと聞いただけで、赤松らは遅れをとったと感じたのである。そして東大側の赤松・宮崎・石渡は、弁論部とは別に同志を募り、吉野のもとに普選研究会を設けることにしたのである。吉野は集まった学生に対して普通選挙制度の総合的研究を題目として各自に項目を分担させて広範な調査を行なおうとしたが、吉野対浪人会の立会演説会事件が突然おこり、研究半ばにして赤松らは同研究会を脱し新人会結成に走った。

#### 4. 立会演説会事件と黎明会・新人会の結成

この有名な立会演説会事件は「白虹事件」に

端を発している。1918年8月25日、全国各地から新聞記者たちが大阪に集まり、寺内正毅内閣への弾劾と言論の自由を主張する関西記者大会が開催された。この大会について報じた『大阪朝日新聞』の記事の中に次のような言葉があった。

<sup>きんおう</sup> 金甌無欠の誇りを持った我大日本帝国は、今や恐ろしい最後の裁判の日が近づいてゐるのではなからうか。『<sup>はっこう</sup>白虹日を貫けり』と昔の人が<sup>つばや</sup> 呟いた不吉な兆が<sup>きざし</sup> 黙々として<sup>フォーグ</sup> 肉叉を動かしてゐる人々の頭に<sup>ひらめ</sup> 雷のやうに閃く。

白い虹が太陽を貫いたように見えるときには兵乱が起こる前兆であるという意味が、「白虹日を貫けり」という言葉にはあった。かねてより大阪朝日新聞社の弾圧を狙っていた大阪府警察部検閲係長の山下文助は、この記事をみて朝憲紊乱の罪に問えると判断した。すぐに内務省と連絡をとり、8月26日づけの夕刊を発売禁止としたうえで、大阪区裁判所検事局に告発した。そして右翼団体の浪人会や黒龍会は大阪朝日新聞社を不穏な暴力的言辞で攻撃し、1918年9月28日、黒龍会員・池田弘寿が同社社長・村山龍平を襲撃した。

この言論弾圧事件に大多数の新聞・雑誌は沈黙したが、吉野作造は『中央公論』（1918年11月号）に「言論自由の社会的圧迫を排す」という短文を発表した。これに対し<sup>とうやまみつる</sup> 頭山満らの国粹団体・浪人会の連中が吉野のところに抗議に訪れた。これが11月23日の浪人会と吉野との有名な立会演説会の開催へと発展した。数百名の学生が「浪人会を葬れ」「吉野博士を守れ」と演説会場に繰り出し、定刻前に会場の内外は学生や労働者であふれかえった。場外にあふれた2,000人の聴衆に対しては、友愛会会長の鈴木文治が声を張り上げて実況中継をしたという。浪人会側からは内田良平らが次々と立って吉野と論争したが、論理において吉野の敵ではなく

演説会は浪人会の完敗に終わった。

浪人会との立会演説会は、大阪朝日新聞破壊運動以来、ややもすれば萎縮せんとした新思想家の陣営を活気づけ、デモクラシー運動を大いに鼓舞した。この機運に乗じて吉野作造、福田徳三と麻生久が主導して一流の学者・知識人を集めて結成されたのが黎明会であり、ほぼ同じ時期に同じ目的で学生を集めて結成されたのが新人会であった。

新人会や黎明会結成の社会的背景には共通点がある。第一に、黎明会は吉野なくしては生まれなかったが、新人会も吉野を師と仰いだ学生たちの団体だった。第二に、両会を結成させた中心人物である麻生久の存在があった。麻生は新人会の結成のための推進と援助をするかわら、黎明会結成の仕事を同時に進行させていた。第三に、両会は同じ社会的背景である吉野・浪人会演説会から発している<sup>(7)</sup>。

新人会結成の直接のきっかけが立会演説会事件であったとしても、大正デモクラシーや1917年のロシア革命、1918年夏の米騒動に影響されたことは間違いなからう。新人会はそれが創立された時代の産物であるとともに、またその時代に生きた傑出した人々の合作による作品である<sup>(7)</sup>。新人会に結集した人々は、大きく分けると次の4つのグループに分けられる。

- ①東京帝大法学部緑会の弁論部員（赤松克麿、宮崎龍介、石渡春雄、鈴木義男ら）
- ②法学部の研究室に残っていた助手、研究生（河村又介、蠟山政道、佐々弘雄ら）
- ③東京帝大基督教青年会員（松沢兼人、住谷悦治、新明正道ら）
- ④中国、台湾、朝鮮からの留学生およびこれを庇護しようとした日本学徒

そのうち、卒業生の中から新人会を援助する者が出てきた。一つは麻生久の仲間、三高時代から縦横会というグループを作っていた棚橋

小虎、山名義鶴、岩井寿郎で、新人会結成の頃は水曜会と名乗っており、慶應義塾大学出身の野坂参三も加わっていた。もう一つは、東亜経済調査局の岡上守道、佐野学などで、彼等も新人会結成の頃は水曜会のメンバーになっていた。

そして1918年12月7日に新人会の発会式を迎えた。赤松が起草した新人会の綱領は、①吾徒は世界の文化的大勢たる人類解放の新気運に協調し之が促進に努む。②吾徒は現代日本の正当なる改革運動に従ふ、という短いものであったが、新人会発足当時のメンバーの意欲と自己規定は、赤松作詞の次の「新人会の歌」によく表れている<sup>(8)</sup>。なお『早稲田大学建設者同盟の歴史』<sup>(13)</sup>には、「新人会一周年記念歌」の歌詞が掲載されている。

- 1、東方の眠り久しき国の児等  
今燦爛さんらんの新たなる  
光明に覚む嬉しからずや。
- 2、閥族と阿権と利己と曲学の  
力合せて塞ぎたる  
世界思潮なみの濤ほとばしる。
- 3、空ひたす世界思潮に身を乗せて  
立てる姿を今見よや  
至高学府の青年の意気。
- 4、権力の前に土下座を強ひられし  
時を去ること五十年  
奴隷の夢は今ぞ昔。
- 5、世は移り時は過ぎ行く何時までか  
意気の青年閥族の  
奴隷となりて身をせばむべき。
- 6、閥族の垣と呼ばれし不詳の名  
今ぞそそが赤門の  
健児の意気を人々よ見よ。

新人会は、「社会主義などを唱えるものは無頼の徒である」という明治的通念を打ち破った。東京帝大法学部というエリートの牙城に新人会のような学生団体が組織されたことは、いわば

晴天の霹靂であった。これ以来、左翼知識人の主流は大学、とりわけ東京帝大などの官立大学から生み出されることになった。学生運動の勃興は無産運動全体のイメージアップに大きく貢献し、プロレタリア陣営にかつてみられなかった知的な雰囲気は漂うようになった。学生運動はいろいろなやり方で無産運動を学問的・理論的方向に導いたが、そのなかで注目すべき変化は研究会活動によって起こった左翼文献の需要の増加と、それに応える左翼出版界の形成である。大正の末、学生運動が全国的展開を始めたころには、左翼文献の需要が左翼出版を営業的に成り立たせるほどに増大したのである<sup>(5)</sup>。

ところで、この時代の日本における政治的自由は極めて制限されたものにすぎなかった。「労働」や「社会」を口にするだけでマークされ、「デモクラシー」にいたっては危険思想の最たるものであった。吉野作造が「民主主義」というのをはばかり「民本主義」という言葉を使ったのもそのためである。もっとも『大正デモクラシー史』全3巻<sup>(14)</sup>をあらわした政治学者の信夫清三郎は、民本主義思想を「帝国主義ブルジョアジーの思想的代弁」と規定した。これに対し、歴史学者のねず・まさしは『批判日本現代史』<sup>(15)</sup>のなかで、民本主義思想を「現在の状況のなかで、可能な手段によって漸進的に改革を企てた」実際の進歩主義として高く評価した。この論争以来、大正デモクラシーへの関心が高まり、幾多の資料の発掘・研究成果の発表が行なわれた。民本主義や大正デモクラシーの評価や論争については、太田雅夫編『資料大正デモクラシー論争史上、下』<sup>(16)</sup>に詳しい。

さて1919年前半には多くの新刊雑誌が現われ、日本における左翼出版の影響力は飛躍的に増大した。総合雑誌『改造』(4月)、『解放』(6月)が創刊され、『大阪朝日新聞』を退社させられたジャーナリストのグループが雑誌『我等』を

2月に創刊した。黎明会が『黎明会講演集』を出版する一方、新人会は機関誌『デモクラシー』を3月に創刊した。この機関誌の創刊は、河上肇の個人雑誌『社会問題研究』とほぼ同時であり、堺利彦・山川均の雑誌『社会主義研究』よりはやかた。

『デモクラシー』誌は薄っぺらな雑誌にすぎなかったが、たちまち大きな反響をよびおこし、一挙に全国的な評論誌たる地位を獲得した。新人会は東京帝大生だけの会ではなく、各地に読者を中心とする支部ができ、思想と行動の団体となった。『デモクラシー』は『先駆』『同胞』『ナロオド』と改題し、たびたび発禁処分をうけながら1922年4月まで、日本の新しい社会改革運動に貢献した。

新人会が発足直後の1年を通じてその意気の高さを持続できたのは、メンバーのほとんどが共同生活に参加したことによる。中国人革命家・黄興所有の東京郊外の邸宅がその宿舎にあてられた。宮崎龍介の父・宮崎滔天は黄興と親交があり、黄興の死後その邸宅の管理をしていたので、新人会の要請により会の本部として邸宅を提供したのである。だが新人会は1920年5月、宮崎龍介が柳原白蓮とのスキャンダル事件により除名されたのを機に黄邸を去った。(つづく)

#### 参考文献

- (1) 勝木渥「大学ルネッサンスをこの教室から！—学生運動不在の大学は糸底の欠けた杯—」『科学・社会・人間』86号(2003年9月)
- (2) 竹内章郎「体験的国立大学論」『哲学と現代』31号(2016)
- (3) 中野貞彦「シールズの学生が卒業式で表彰される」『新しい風』2016年5月号
- (4) 高木秀男「日本国憲法の危機と学生運動—「教育の政治的中立性」をめぐる—」『生徒とともに』58号(2016)

- (5) スミス『新人会の研究—日本学生運動の源流—』  
東京大学出版会 (1978)
- (6) 石堂清倫, 豎山利忠編『東京帝大新人会の記録』  
経済往来社 (1976)
- (7) 中村勝範編『帝大新人会研究』慶應義塾大學法  
學研究會 (1997)
- (8) 佐々木敏二「『新人会 (前期)』の活動と思想」  
『キリスト教社会問題研究』13号, 同志社大学  
人文科学研究所 (1968)
- (9) 麻生久『黎明』新光社 (1924)
- (10) 太田雅夫『大正デモクラシー研究—知識人の思  
想と運動—』新泉社 (1975)
- (11) 藤田富士男, 大和田茂『評伝平沢計七』恒文社  
(1996)
- (12) 菊川忠雄『学生社会運動史』中央公論社 (1931)
- (13) 建設者同盟史刊行委員会『早稲田大学建設者同  
盟の歴史』日本社会党中央本部機関紙局 (1979)
- (14) 信夫清三郎『大正デモクラシー史全3巻』日本  
評論社 (1954)
- (15) ねず・まさし『批判日本現代史』日本評論社  
(1958)
- (16) 太田雅夫編『資料大正デモクラシー論争史上,  
下』新泉社 (1971)

＝新著紹介＝

## 西條敏美著『知っていますか？ 日本数学者ゆかりの地 —日本数学の源流を訪ねて—』 恒星社厚生閣

高木秀男 (日本科学者会議福井支部)

本書でもたびたび紹介している科学史家・西條敏美氏の、「科学散歩シリーズ」の新著『知っていますか？ 日本数学者ゆかりの地』が出版された。今回取り上げたのは、西條氏が自らの足で回った、江戸時代から近代までの日本の数学者31名のゆかりの地である。阿部有清<sup>ありきよ</sup>(1821～97)を除く30名は、「日本の数学者のふるさと」として『数学セミナー』(2005年4月～2006年3月, 2008年4月～2009年9月)に連載されたものである。本には、数学者の生年月日順に、ゆかりの地の住所、アクセス、メモが記され、写真も多数添えられている。

これまでの西條氏の「科学散歩シリーズ」は、科学者の生家跡、記念館、石碑、銅像、墓などゆかりの地を巡り歩いて、紀行エッセイ風にまとめたものであった。だが今回の本は『数学セミナー』に連載したもので、現地写真付きの辞典的記述で数学者ゆかりの地を紹介したものである。ただし『数学セミナー』以外の雑誌に書いた紀行エッセイ風の記事があったので、重複する人物も含むが8名の数学者に関する記事が本書に掲載されている。

本書で取り上げられた広い意味の数学者は、全部で33名である。近現代の数学者は菊池大麓(1855～1917)、狩野亨吉<sup>こうきち</sup>(1865～1942)、林鶴一<sup>つるいち</sup>(1873～1935)、三上義夫(1875～1950)、高木貞治(1875～1960)、小倉金之助(1885～1962)、岡潔(1901～78)、下村寅太郎(1902～95)など、よく知られている名前と並んでいるが、江戸時代の和算家は吉田光由<sup>みつよし</sup>(1598～1672)、関孝和(1642？



～1708) など一部を除いてあまり知られていない名前が多い。だが、簡潔にして要を得た説明を読めば、その人の業績がよくわかりたいへん勉強になる。

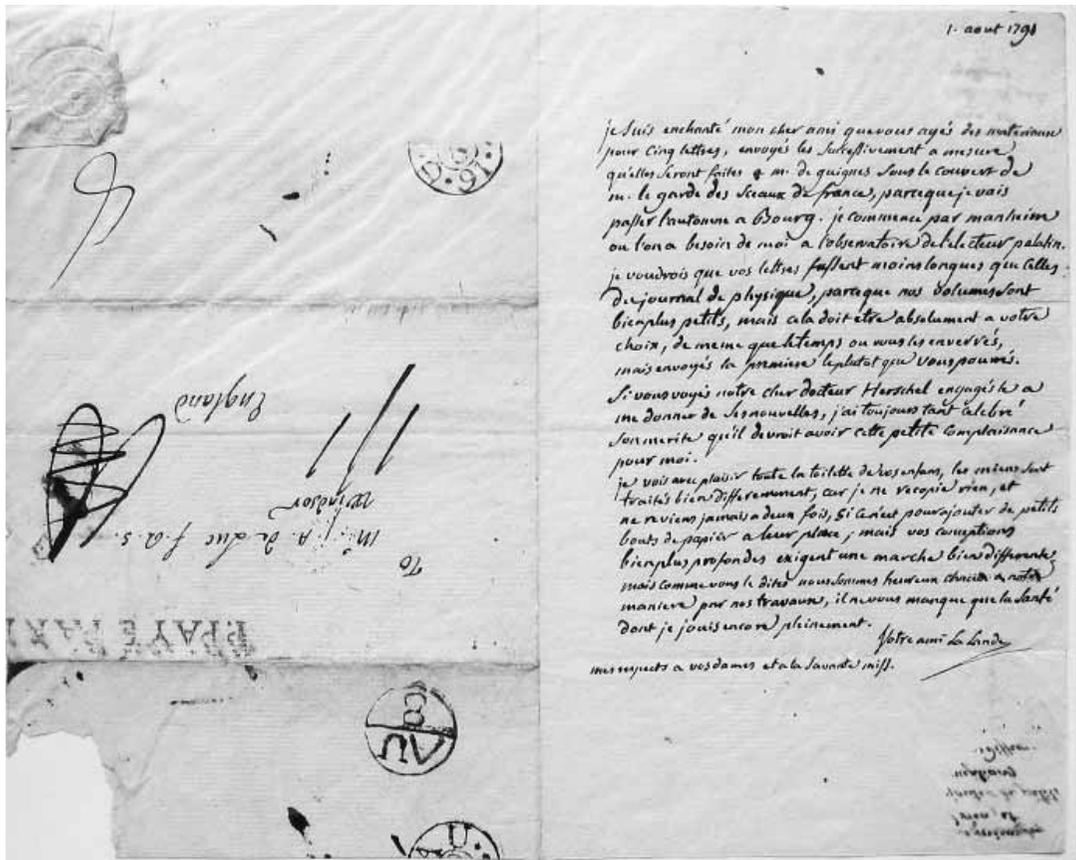
本書に出てくる和算家の説明を読むと、数学だけでなく天文暦学も勉強していた人が多いことがわかる。天文暦学を学ぶためにはどうしても数学の知識が必要であったからであるが、数学に詳しいものに天文暦学を学ばせて改暦の仕事を手伝わせる目的もあった。その意味で本書では取り上げられなかったが、改暦に加わった興味深い暦算天文家は、渋川春海(1639～

1715), 麻田剛立 (1734 ~ 99), 間重富<sup>はざま</sup> (1756 ~ 1816), 高橋至時<sup>よしとき</sup> (1764 ~ 1804) など何人もいる。

八代将軍徳川吉宗 (1684 ~ 1751) は江戸城で天体観測をするほど天文好きであったが、1745年に西洋天文学による<sup>じょうききょう</sup>貞享暦の改暦を命じた。江戸時代には4度の改暦がなされたが、フランスの天文学者ランデ (1732 ~ 1807) の『天文学』のオランダ語訳本『ランデ暦書』が伝わり、日本語に訳されたのを機に、西洋天文学がその後の日本の暦学に大きな影響を与えた。ただし暦算天文家の目的は実測に合う暦をつくることにあり、天動説と地動説の優劣には興味を示さなかったし、彼らの関心はあく

までも天体の運動学にあり、天体の運動の原因にまで深入りする動力学は理解の外であった。そんな中でオランダ通詞の志筑忠雄 (1760 ~ 1806) が、ニュートン力学を理解し『暦象新書』 (1802) を表わしたことは特筆に値する。

それにしても和算家の名前が一般にはあまり知られていないのは、明治以降に体系的な「学」としての西洋数学の導入によって、「術」としての和算が衰退したことによる。明治以降、漢方医学は新しい医師制度によって没落したが、日本の伝統科学のひとつであった和算もまた、同様に「学制」という制度によって没落した。「学制」によって和算が廃止され、洋算の採用が決められたからである。和算は、江戸時代に関考



日本の天文学に大きな影響を与えたランデの 1791 年の書簡 (高木秀男所蔵)

和, 建部賢弘 (1664 ~ 1739), 久留島義太 (? ~ 1757) らによって高度に発展させられていた。

関流の祖で算聖とも称される関孝和は, 算木による代数学を大幅に改良, 記号を使う筆算式の数学を独自につくりだした。また彼は行列式の発見においてヨーロッパ数学に先んじており, ヤコブ・ベルヌーイ (1654 ~ 1705) よりさきにベルヌーイ数を導入するなど数々の業績を残した。建部賢弘は級数展開をつかって計算し 11 桁の三角関数表を作ったし, 久留島義太はオイラー (1707 ~ 83) より早くオイラー関数を発見し, ラプラス (1749 ~ 1827) より早くラプラス展開法を発見した。

このように優れた研究成果をあげながら, 和算はどうして没落したのであろうか。小倉金之助は、『近代日本の数学』新樹社 (1956年) のなかで和算の特質を次のように要約している。

1. 17・18世紀におけるヨーロッパの数学は, 自然科学や生産技術と密接に関連して進んだのに, 日本では科学・技術の未発達のために, 数学の進展はそれらと遊離してしまった。そのうえに和算家は, ヨーロッパの数学者にくらべて, 哲学や思想との接触が極めて少なかった。
2. それで和算は「無用の用」として発達した。「科学」とか「真理」とかいうよりも, 趣味として「芸に遊ぶもの」として進んだ。
3. 封建時代の制度と思想を反映して, 和算家たちはギルド的な流派をつくり, 秘伝主義によって教授し, 数学の独占を行なった (このことに関しては反論する者もある)。
4. 和算は, 数学の本質ともいふべき論理性に欠け, 十分に系統ある体系をつくることができなかつた。もっとも, 直観的な見通しと帰納的な推理によって証明精神の不足を補いながら, ある限度の成功をおさめたが, 科学というよりむしろ「術」と呼ぶべきであろう。

数学の本質から見ると, 無用とも思われる複雑な技巧が多かつた。

ところで, 松本順 (陸軍), 戸塚文海 (海軍), 佐藤尚中 (東京医学校), 長与専斎 (内務省), 佐々木東洋 (杏云堂) など, 当時の西洋医学界の代表 50 数名が集まって東京医学会社が設立されたのは 1875 年であつた。同じような趣旨と規模で東京数学会社が設立されたのは, その 2 年後の 1877 年 9 月のことである。初代の社長は元老院議員でかつては蕃書調所教授を務めた神田孝平 (1830 ~ 98) で, 発足当初の正会員は 117 名であつた。

海軍教授の中川将行 (1848 ~ 97) は東京数学会社の和算的な空気にあきたらず, 「数学会社の目的」という和算を葬る辞を『東京数学会社雑誌』第 52 号 (1882 年) に書いた。そして 1884 年には東京数学会社の大改造が行なわれ, 東京数学物理学会と改称された。この変革の主体は, 菊池大麓を盟主とする東京大学関係の西洋数学者であつた。そのため大量の和算家が脱会することになり, 一方で山川健次郎 (1854 ~ 1931) などの新進の物理学者や寺尾寿 (1855 ~ 1923) などの天文学者たちとの同盟が結成された。なお神田孝平と一緒に東京数学会社を立ち上げた柳植悦 (1832 ~ 91) は, 本書で取り上げられている。

本書の巻末には和洋数学史年表が掲げられ, 日本の数学と世界の数学の歴史が対照的に表示されており興味深い。また本書に取り上げられなかつた多くの数学者も含めて, 日本数学者ゆかりの銅像, 記念碑, 墓碑等の所在施設および所在地一覧表が付けられている。そして参考図書案内および人名索引も載せられている。

(本書は2016年刊 B6版 並製  
p.222 定価3000円+税)

=新刊案内=

平野治和編著

『花もひらかぬ一八のまま—沖繩戦で散った少年飛行兵の日記—』

合同フォレスト(四六判上製 325頁 2000円+税)

高木秀男(日本科学者会議福井支部)

沖繩戦で18歳の若さで戦死した、光陽生協クリニックの平野治和院長の叔父にあたる平野利夫さんの修養日誌が、貴重な歴史資料として公刊された。2015年5月30日にこの少年兵の日誌を発見された平野治和氏が、医師という忙しい仕事をしながら週末の時間をさいて公刊にこぎつけた。少年兵は40万人もいたが、これまで少年兵の日誌が公刊されたことはないという。安倍政権が憲法違反の安保関連法案を強行可決して、戦前への回帰の世相も公刊への動機となった。

本書は少年兵だった平野利夫の水戸陸軍航空通信学校時代の日誌を全文、原文のまま掲載することを刊行目的としているが、この本にはさまざまな工夫がされている。日誌を読むための知識、一般の読者にはなじみの薄い軍隊、電気通信、無線機、モールス信号、暗号などにつき、専門家の協力をえて丁寧に説明している。また日誌の記述の中でも、必要と思われる箇所には注釈をつけている。

なお当時の少年たちの置かれていた立場を理解するために、江藤千秋著『積乱雲の彼方に—愛知一中予科練総決起事件の記録—』(法政大学出版局)を合わせて読まれることを勧めたい。



目次

- はじめに
- 利夫と15年戦争の年表
- 日本地図と利夫の足跡
- 第1章 生い立ちから水戸陸軍航空通信学校  
入校まで
- 第2章 日誌を読むための知識
- 第3章 修養日誌 一冊目
- 第4章 修養日誌 二冊目
- 第5章 修養日誌 三冊目
- 第6章 水戸陸軍航空通信学校卒業から沖繩  
戦での戦死まで
- 参考文献
- おわりに



## 編集後記

今号は2016年6月8日に逝去された庄野義之先生の追悼小特集号とした。庄野先生と親しかった9名の方から追悼文をいただいた。それぞれの追悼文には、庄野先生の福井大学工学部教授時代、工学部長時代、放送大学福井学習センター長時代および日本科学者会議での業績や活動について触れられている。

なかでも小倉久和氏の追悼文には、庄野先生が福井大学工学部教授、工学部長として果たされた業績について詳しく書かれている。

櫻井康宏氏の追悼文で特に貴重なのは、庄野先生が晩年に主宰していた「論理を考える」研究会について触れられている点である。この研究会は松浦義則氏、小倉久和氏、櫻井康宏氏、寺岡英男氏と一緒に庄野先生が始められたが、メンバーのそれぞれが福井大学の要職に就かれ忙しくなったために続けられなくなった。福井支部の例会で研究会の成果を報告してほしいと要望したこともあったが、ついに実現できなかった。しかし櫻井氏の追悼文によって、庄野先生が研究会の最後に自分の考えていた「ゆ

らぎ」「多様性」という観点からみた、さまざまな現象に関する「メモ」を残していたことを知った。私は庄野先生の死後、先生の蔵書の整理を行なったが、庄野先生が晩年この研究会のために何を勉強していたかを知ったので、この「メモ」には大変興味を覚えた。

西川嗣雄氏の追悼文では、JSA 福井支部結成の呼びかけ文を西川氏が準備したことをはじめて知った。「福井支部結成の呼びかけ文」と「福井支部結成宣言」は『日本科学者会議福井支部20年の歩み』(1993年4月)に掲載されている。

追悼文以外では屋敷紘美氏が、たまたま図書館で借りた本に興味深い書き込みを見つけたときの話を書いて投稿してくれた。軽妙なエッセイで、最後に落ちが付いているのが屋敷さんらしい。新刊紹介は、西條敏美氏の「科学散歩」シリーズの最新刊である。

私の「学生運動の源流「東京帝国大学新人会」」は、3回連載の予定である。学生運動の現状を念頭において、今よりはるかに厳しかった時代の学生運動の歴史を振り返っておきたいと思っている。

(高木秀男)

福井の科学者	第127号	2016年12月15日発行
編集・発行	日本科学者会議福井支部 頒価500円	
連絡先	〒910-3190 福井市江上町55字鳥町13-1 (郵送の場合) 福井医療短期大学 看護学科 (680円) 森 透	
	TEL: 0776-59-2204(代表) FAX: 0776-59-2205	
	E-mail t-mori-fcm@krf.biglobe.ne.jp	

＝会員の著書紹介＝

書名 **畜産物と健康** —卵・牛乳・肉の生産から考える

著者 加藤武市 発行 科学堂  
発行年月日 2005年6月 定価 1500円

## 福井県医療生活協同組合

〒910-0026 福井市光陽2丁目18-15 TEL (0776) 27-2318  
FAX (0776) 24-8290

**光陽生協病院**  
TEL (0776) 24-5009

**つるが生協診療所**  
TEL (0770) 21-0176

**ショートステイきらら**  
TEL (0776) 21-8525

**光陽生協歯科診療所**  
TEL (0776) 24-8784

**光陽生協クリニック**  
TEL (0776) 24-3310

**たけふ生協歯科診療所**  
TEL (0778) 22-5666

**デイケアさんさん**  
TEL (0776) 24-5524

**さかい生協歯科診療所**  
TEL (0776) 67-6333

**光陽訪問看護ステーション**  
TEL (0776) 24-9996

**つるが生協在宅総合センター「和」**  
TEL (0770) 25-4311

**光陽ホームヘルパーステーション**  
TEL (0776) 24-9997

**小規模多機能介護施設しんじょういこい**  
TEL (0776) 60-2110

**光陽訪問看護ステーション居宅介護支援事業所**  
TEL (0776) 24-9990

**総合企画印刷** 広告・パンフレット・DM・雑誌・記念誌・機関誌  
自費出版・会員名簿・会員管理・アンケート集計

## (有)ワープロセンター HOPE

〒915-0847 福井県越前市東千福町21-4  
TEL: (0778) 24-1146 FAX: (0778) 24-2339  
e-mail: hope01@galaxy.ocn.ne.jp